

テュルゴー理論の経済思想史上の位置と評価

——佐藤公俊氏の批評に答える——

中 川 辰 洋

目次

はじめに

1. テュルゴーの経済思想史上の位置——テュルゴーはフィジオクラート派か？
2. テュルゴーの経済思想史上の評価——経済学における「言語と文法」
3. 学問としての経済学の目標と本性——経済学はモラル・サイエンスか？

結びにかえて

参考文献

Appendix: TATSVHIRO NAKAGAWA – Curriculum vitae brevis et opera academicae

『この島に、ゆ——幽霊はいるの』アンナがこぼった声でアングスにたずねた。『ここはスコットランドですからな。幽霊の出ない場所なんぞありやしません』

——スーザン・イーリア・マクニール『スコットランドの危険なスパイ』

はじめに

筆者は2020年10月、佐藤公俊（長岡工業専門学校名誉教授）氏が『季刊 経済理論』第57巻第3号（経済理論学会編）に寄稿した拙著『テュルゴーとアダム・スミス』（2019年）の書評についてリプライがあれば報告されたい旨同誌編集委員会の方からメールで知らせを受けた。

結論を先取りすれば、佐藤氏の書評に異論はない。拙著を丹念に読み内容を精査・要約されていることに感謝している。ことほどさように、以下の議論と関連するが、筆者が2016年に上梓した『カンティヨン経済理論研究』の書評

(『経済学史研究』第59巻第2号、所収)のように悪意に満ちた、それでいながら勉強不足が歴然とした主張とは好対照をなす。

くだんの評者は、リシャール・カンティヨン著『商業一般の本性に関する論説 (*Essai sur la nature du commerce en général*)』(以下『商業論説』と略記)の最大の貢献を、「資本 (capital) の所有と経営の分離」——「企業 (entreprise) の所有と経営の分離」と言い換えることもできる——にもとめ、これを認めない筆者を批判した気になっている。評者が間違いだらけでチンプンカンプンの津田内匠の邦訳に依拠していたことはこのさい大目に見よう。しかしながら、カンティヨンが「資本」概念を定位していないことは諸外国の研究者のなかで定説であるにもかかわらず、「資本」の所有と経営を喋々する愚は看過できない。それに「企業」にしても、その定義すらない。けだし、土地所有者と企業者の関係も「所有と経営の分離」とははなはだもって御大層な話であり、せいぜいのところ「プリンシパル=エージェント理論 (principal-agent theory)」の原初形態というべきであろう。

佐藤氏が紹介しておられるように、ラテン語の“capitalis”を語源とする“capital”に「資本」の意をあたえ概念規定を行ったのは、18世紀の時代精神 (Zeitgeist) である啓蒙思想の申し子と謳われたオーヌ男爵アンヌ・ロベール・ジャック・テュルゴーである¹⁾。より厳密にいうならば、テュルゴーは“メントール (Mentor)”と生涯敬愛したグルネー侯爵ジャック・マリー・ヴァンサン²⁾の着想を継

1) テュルゴーが“オーヌ男爵 (Baron de l'Aulne)”と称されるのは、1766年に北仏ノルマンディー地方の“オーヌ (Aulne)”に土地を購入して以降のことである。“オーヌ”とは、テュルゴー家累代の居城の所在する領地ラントゥイユからさほど離れていない、ケルト語の“アオン (Aon)”に由来する地名である。しかるに、わが国ではカール・マルクスの大著『資本論 (*Das Kapital*)』(例えば、国民文庫版)をはじめ“ローヌ男爵”と訳出されることがすくなくない。間違いとはいえないが、だからといって適切というわけでもない。わが国ではフランス語の地名の定冠詞はこれを省いて表記するのをつねとするからである。例えば、19世後半のルイ=ナポレオン・ボナパルトの治世下で、テュルゴーの尊父ミシェル=エティエンヌがパリ市商人頭(今日のパリ市長に相当)の職にあつて果たせなかったパリ市大改造を指揮したジョルジュ・オスマンは“Préfet-Baron de la Seine”, 邦語で“セーヌ県知事・男爵”と表記する。“ラ・セーヌ県知事・男爵”とはいわない。“Le cours de la Seine”を“セーヌ(川)の流れ”と訳出するのと同じである。なお蛇足ながら、しばしば見かける“Baron de Laulne”は明らかな誤記またはミスプリントである。二次文献をたみにした証である。

承・発展させたというべきであり、そしてそのグルネーであるが、サー・ジョサイア・チャイルドの名著『新商業講話 (A New Discourse of Trade)』の理論を吟味検討した末に資本概念の原型を生み出したのであった。

テュルゴーの代表作『富の形成と分配に関する諸省察 (Réflexions sur la formation et la distribution des richesses)』(以下『諸省察』と略記)の最大の貢献は、グルネーゆずりの新しい富の概念「資本」と、これまたグルネー=テュルゴーの考案したタームで資本の所有者を意味する「資本家 (capitaliste)」とを軸に近代商業社会 (société commerçante) を律する経済関係の組織的解明を行ったところにある。ことほどさように、そこで明らかにされたことは、資本が富の形成と分配、したがってまた諸商品の生産と流通の主たる担い手として人間の営みや人間と人間の関係を律するというのであった。その意味からすれば、テュルゴーの『諸省察』こそはまさに「資本論 (De capitali)」にほかならない。

この点について、一つ申し添えておきたい。すなわち、戦前・戦中・戦後を通じてテュルゴーの『諸省察』の邦訳は、原田光三郎 (1924年)、永田清 (1934年)、それに津田内匠 (1962年) の3種類あるが、いずれも「及第点」に達しない (本稿末尾の「参考文献」を参照されたい)。後述のように、カール・マルクスの手にした『諸省察』がピエール=サミュエル・デュポンによって改竄されフィジオクラート流に潤色されたテキストであったがゆえに、テュルゴーをケネーの愛弟子でフィジオクラート派の有力メンバーと誤解したのはやむを得ないかもしれない。

その一方でドイツ出身の思想家とほぼ同時代人でフランスの歴史家オーギュスト・ブショーが1846年9月10日にアカデミー・フランセーズ (Académie Française) で行ったテュルゴー追悼講演 (éloge) のなかでテュルゴーを「フィジオクラート派とは一線を劃する」思想家であったと評価していたこと、そして自由主義的経済学者のアンリ・ボードリヤールをはじめとするアカデミシャンがブショー説を支持したことに思いを致せば、マルクスのテュルゴー評価はかならずしも適切とはいえない²⁾。そんなマルクスのテュルゴー評価を金科玉

2) マルクスの読んだテュルゴーのテキストはデュポン版全集かかれの衣鉢を継ぐデー

条として「及第点」に達しない誤訳だらけでチンプンカンプンの『諸省察』を読めば、この国でテュルゴーの評価が低くなるのはけだし当然である。

佐藤氏は筆者の主張をおおむね支持されておられるように見受けられるが、だからといって「注文」がまったくないというわけでもない。その一つがテュルゴーの経済理論の評価と経済学史上の位置に関するものであり、すくなくとも最新の欧米諸国の研究状況をわが国の研究者に紹介してほしいというのである³⁾。ありていにいえば、肝心なめの議論は著者である筆者(中川)に下駄をあずけたに等しい。さはさりながら、いい機会だからこのさい佐藤氏の注文を受け、テュルゴー理論の評価と経済思想史や経済学史上の位置と意義をあらためて論ずることにしたい。

1. テュルゴーの経済思想史上の評価——テュルゴーはフィジオクラート派か？

はじめに近年欧米諸国でのテュルゴーの評価を紹介しておこう。イギリスの経済学者アントニー・ブリュワーはテュルゴーを「古典経済学の創始者 (founder of classical economics)」, かたやアダム・スミスを「イギリス古典経済学の創始者 (founder of English classical economics)」と評価する⁴⁾。またカナダ・ケベック大学で久しく教鞭を執ったジル・ドスタレルの「資本主義の理論家 (théoricien du capitalism)」にして「自由主義の弁護人 (avocat du libéralisme)」, イギリスはバーミンガム大学で経済思想史を講義したテレンス・ウィリアム・ハチソンの、

ル=デュサール版全集であった (Daire et Dussard [1844])。この点については、中川 [2013; 2019b; 2020] も参照されたい。もっとも、筆者がボードリヤールの名前を挙げたことをマルクスは承服しないであろう。フランス語版『資本論 (*Le Capital*)』でかれを好意的に評価していないからである (Marx [1867], p. 611)。

3) 佐藤 [2020], 81 ページ。

4) さしあたり、Brewer [1986; 1987; 2011] を参照されたい。また、英経済紙『フィナンシャル・タイムズ (*Financial Times*)』のコラムニストとして長年健筆をふるった、いわゆる“オールド・マルクス・ボーイ”のサミュエル・ブリタンが2007年2月に同紙に寄稿したコラムでのべたことも基本的に同じと解してよい。曰く、「スコットランド出身の思想家アダム・スミスは経済学の生みの親ではなかった。かれはこの分野における英国本流のならわしをかたちづくった最初の人物であった」(Brittan [2007])。

「古典経済学の創始者」どころか「レオン・ヴァルラス（ワルラス）の先駆者（*précurseur de Léon Walras*）」などもプリュワー説に近い⁵⁾。さらに近年ではテュルゴー独自の主観価値説——心理経済価値論（*théorie psychologique de la valeur*）⁶⁾——に着目して「前期の行動経済学者（*prot-théoricien de Behavioral Economics*）」と評する向きもある⁷⁾。

-
- 5) さしあたり、Lundberg [1964]; Dostaler [2010a]; Hutchison [1982: 1988] を参照されたい。マーク・ブラウグは「アダム・スミスの『国富論』の最初の2篇のスケルトンはテュルゴーの作品（『諸省察』）のなかにある」（Blaug [1991], p. x.）と言い切っているが、オーストリア学派のマレー・ロスバードもブラウグときわめて似たテュルゴー評価をしている（Rothbard [1986]）。また、ハチソンはテュルゴーゆかりの地リモージュで開催されたテュルゴー没後200年国際シンポジウム「テュルゴー——経済学者にして行政官（*Turgot: économiste et administrateur*）」（1981年10月8, 9, 10日、於・リモージュ大学法経学部）に提出した論文「テュルゴーとスミス（*Turgot and Smith*）」において、テュルゴーを「古典経済学の創始者」はおろか「新古典派の先駆者」と看做し、テュルゴー独自の主観価値説にもとづく価値・価格論のスミスの客観価値説に対する理論上の優位性もさることながら、フランスの経済学者クロード・ジェシユアと同様、レオン・ヴァルラスの先駆者としてきわめて高く評価していた（Hutchison [1982]; Jessua [1992]）。ハチソンはその後1988年に出版した『アダム・スミス以前（*Before Adam Smith*）』では、価値論に加えて、「期待（*expectation*）」理論の先駆者という評価を加えている（Hutchison [1988]）。フランスの経済学者のジョエル＝トマ・ラヴィックスとポール＝マリー＝ロマーニもハチソンとほぼ同様の評価をしている（Ravix et Romani [1992]）。
- 6) テュルゴーの価値論は時に「感覚的経済価値論（*théorie sensualiste de la valeur*）」と称される場合もある。この点くわしくは、Faccarello et Cot [1992]; 手塚 [1933]; 中川 [2016; 2019a] を参照されたい。
- 7) ハチソンやわが国戦前の手塚壽郎の研究に代表されるように、テュルゴーを「新古典派の先駆者」とみる研究者は決してすくなくない。しかしそうした評価に対して異論・反論がないではない。オーストラリアの経済思想史家ピーター・D. グレーネヴェーゲンはその最右翼であり、テュルゴーの心理経済価値学説の根幹をなす「有用性（*bonté*）」について、「効用（*utility*）」のほか、「保蔵性（*storebility*）」や「希少性（*scarcity*）」などをふくむ広い概念であること、またヴァルラスなどと違って「効用を保有される商品の数量の関数」と見做されていないことなどの理由をあげて、テュルゴーを「新古典派の先駆者」とする解釈に反論している。グレーネヴェーゲンによると、テュルゴーの学説はアルフレッド・マーシャルの「実質費用説（*real cost theory*）」の原初形態であるというのである（Groenewegen [1970], p. 125）。もっとも、グレーネヴェーゲンの所説は一義的には『諸省察』と、旧友のアンドレ・モルレ神父のオーダーで起稿するも未完成の草稿「価値と貨幣（*Valeurs et monnaie*）」をベースにしたものであり、手塚壽郎がその論文「心理経済価値学説の歴史的研究の一節」での確にのべているように、これらに加えて「グラスラン氏の草稿に関する所見（*Observations sur les mémoires de Graslín*）」などの論稿をふくめてテュルゴー価値論をあらためて総合的に判断すれば、テュルゴーの所説における「心理経済価値学説」——

これらはいずれもテュルゴーの近代商業社会の理論的解明に与る功が大であったとの謂いであろうが、この点で考慮すべきことは二つある。一つはテュルゴーとフランソワ・ケネーとの関係、いま一つはテュルゴーとアダム・スミスとの関係である。後者については、佐藤公俊氏が拙著の書評で詳細に紹介されているのであらためて言及するまでもなからう。

わが国では第2次世界大戦前から、テュルゴーとはいえば、ケネーの愛弟子にしてフィジオクラート派の有力メンバー、ケネー学説の完成者、ひいてはスミス学説を準備した先駆的研究者というのが、新古典派、マルクス（主義）派を問わず「定説」となっている⁸⁾。

すなわち主観価値学説の側面が『諸省察』このかたよりいっそう鮮明になってきていることを容易に見て取ることができる。ただし、手塚がテュルゴーの価値論を評して「十八世紀に於ける心理経済価値学説の云は、point culminant〔最高峰〕をなすものである」（手塚 [1933], 2 ページ）という見方もできないではない。しかるに、グレーネヴェーゲンのいうようにテュルゴーが「効用を保有される商品の数量の関数」と考えていないことは非難されるべきことではなく、むしろ「行動経済学の先駆者 (pioneer of Behavioral Economics)」として評価されるべきであろう。その意味からすれば、グレーネヴェーゲンは期せずしてテュルゴー価値論を肯定的に評価することになったといっただいであろう。

- 8) 京都帝大の山口正太郎が1930年の論稿で「重農學派よりアダム、スミスへの過渡期の最大著作たるテュルゴー〔テュルゴー〕の『富の形成と分配』〔『諸省察』〕は経済學史上の注目すべき著述として看過することを許されざるものである」（山口 [1930], 98 ページ）といい、同じく出口勇藏が「ヴォルテールの同時代人であり、重農學派の完成者」（出口 [1942b], 81 ページ）と決め付けたのが好例である（山口 [1929] もあわせて参照されたい）。戦後早稲田大学の久保田明光などもこのような見解の持主であった。一方、マルクス（主義）派は、『資本論』成立史の「鍵を握る」とされるマルクスの私的な読書ノート（未定稿）が、ダヴィド・リャザーノフなどの手によって『剰余価値学説史 (Theorien über den Mehrwert)』のタイトルで出版されて以降、ケネーの「経済表」論や「純生産物」論の評価に重点が置かれ、テュルゴーはケネーの後継者、ケネー理論の完成者という位置づけをあたえられるようになる。フリードリヒ・エンゲルスの手になる『反デューリング論 (Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft)』の欄外注でマルクスが引用したオイゲン・デューリングの一句「テュルゴーとともに、フィジオクラシーは実践的にも理論的にも終焉していた」（Marx [1877], p. 1525）は、そうした解釈を裏付けるものと看做され、「テュルゴーは最後のフィジオクラート派」という評価が下された。その意味するところはこうである。すなわち、アダム・スミスの学説の成立させる「前期的 (prophase) 作業は終わり、テュルゴーはケネーともどもスミス『国富論』に吸収されたということである。このような解釈の代表例として、如上の研究のほか、さしあたり、島田 [1927]、藤塚 [1970] を紹介しておきたい。

はたしてそうであろうか？ わが国 18 世紀経済思想史研究の最大の功労者の一人である手塚壽郎は、1927 年に神戸高等商業学校の『國民經濟雜誌』に寄稿した「グルネーの經濟思想」のなかで、フィジオクラート派の 3 つの「原則」に照らして、テュルゴーは「フィジオクラート派ではなかった」と断言する。その原則とは、①農業のみが生産的である、それゆえ②農業のみが租税を負担すべきである、③自由貿易を推奨すべきである——の 3 つである⁹⁾。

このうち①は、佐藤氏が要領よく整理されておられるので省略したいが、一つだけ補足しておくことにする。すなわち、テュルゴーがケネーのアイデアである「純生産物 (produit net)」を、農業をふくむ全産業で生み出されると説いたことに思いを致せば、両者の違いは明らかである¹⁰⁾

つづく②は農業を対象とした間接税の一種である「単一課税 (impôt unique)」であるが、これはケネーのオリジナルではない。フランスの経済思想史家シモース・メイソニエによって発掘されたグルネー・グループの手になるイギリス東インド貿易会社 (East India Company) の元総裁サー・ジョサイア・チャイルドの名著『新商業講話』の仏語訳に添付する計画であった「解題 (Remarques)」の草稿 (最終稿かそれに近い) のなかで、グルネーがケネー一門に先駆けて農業をふくむ全産業を対象とする単一課税を提言していた¹¹⁾。単一課税をフィジオクラート派の専売特許と妄信していたわが国のケネー最員の重農学派の面々には青天の霹靂であったと推察する。

9) 手塚 [1927]。なお、手塚の議論の詳細は、中川 [2013] (とくに「付論 I チャイルド——グルネー——テュルゴー」) をあわせて参照されたい。

10) テュルゴーは『諸省察』第 66 節でこういていた。すなわち、「企業者は、それが土地耕作企業者であれ、製造業企業者であれ、その前貸し利潤を回収するのは、土地の生産物もしくは製造品の販売によるしかない」(Turgot [1766c], p. 572)。これに従えば、土地所有者に支払う借地料 (地代) が「純生産物」の貨幣的表現であるというアイデアは希薄化し、テュルゴーのいわゆる「資本」全体の報酬と同一視されることになる。ここをもつて、フランスの経済学者クロード・ジェシュアが「純生産物の一般化 (généralisation du produit net)」と規定したゆえんである。

11) Gournay [2008 (1754)], p. 322。ちなみに、メイソニエによると、グルネーの「解題」は時の財務総監 (現代の総理大臣職に相当) ジャン＝バティスト・ド・マシヨール・ダルヌーヴィルによる出版差止要求により目の目をみることはなかった。以上については、Dostaler [2010b]; Meyssonnier [2008] もあわせて参照されたい。

ちなみに、早稲田大学の山川義雄は戦後間もなく『早稲田大学政治経済學雑誌』に寄稿したある論稿で「わが手塚教授の…」¹²⁾と記していたように自他とも認める手塚説の支持者であったが、後年は常盤の森の重鎮・久保田明光に倣いフィジオクラシーならぬ「重農派経済学」——アダム・スミスのいわゆる「農業システム」または「農業学説」¹³⁾——の研究に傾斜していった。山川の学位請求論文『近世フランス経済学の形成』に収録された旧稿はいずれも久保田説をなぞるかたちで改稿され、ために「わが手塚教授」の文言も消えてしまった。爾来、手塚説に言及する研究者は皆無とってよい。それはまたわが国では、新古典派といわず、マルクス（主義）派といわず、テュルゴーがケネーや「フィジオクラート派とは一線を劃」し、ヴァンサン・ド・グルネーの系譜に連なる思想家という観点からの研究が事実上途絶えたことを意味する。

そして最後の③であるが、ケネーが「自由貿易をかならずしも原則としない」ことは、フランソワ・ソーヴェール＝ジュールダンをはじめ多くの研究者の説くところとなっている（Sauvaire-Jourdin [1903]）。わが手塚教授も条件つきなが

12) 例えば、山川 [1948], 41 ページを参照されたい。

13) フィジオクラシーとは、ギリシャ語の“Φυσιο (physic/physique; 自然)”と“κρατία (kratia; 力, 支配)”のふたつの言葉を合成したネオオロジズムで、生みの親であるピエール＝サミュエル・デュボンに、字面どおり“自然の力”または“自然の統治”であつてもつばら“農業”を意味するものとは考えていなかった。それにもかかわらず、ことさら“農業”に関する学問と見做されるようになったのは、アダム・スミスの力に与るところが大であった。すなわち、スミスは『国富論』第4篇第9章「農業システムについて (agricultural systems)」において、土地の生産物が「すべての国の収入の源泉」と説く「農業システム」(Smith [1776], p. 627. 訳, 465 ページ)の誤った学説の作者としてフランソワ・ケネーを紹介していることに起因すると考えられる。スミスはこれを非難するかたわら、「[ケネーの学説は]おそらくこれまでに発表されたものの中で、最も真理にせまったものであり、またそれゆえに、このきわめて重要な科学の諸原理を細心に検討しようとするすべての人々の考慮に十分値する」(Idem, p. 642. 訳, 474 ページ)とあって、ケネーとかれの支持者であるフィジオクラート派の主張を一定程度評価している。その意味するところは、ケネー一門の「自然秩序 (ordre naturel)」へのスミス一流の「共感 (copassion)」であったとってよいのであるが、それはまた、玉野井芳雄がいみじくもいったように「[スミス一流の]資本主義賛歌」(玉野井 [1956], 231 ページ)にほかならない。筆者が「リシャル・カンティヨンと価格メカニズム」と題する論稿のなかで「スミスはブリテン島における『フィジオクラート派の長男』[中略]ともいふべき一面を有していた」(中川 [2006/2207ii], 104 ページ)とあったのもそのような意味おいてであるが、この点のはちにあらためて論じたい。

らグルネーが国の内外の経済活動の「自由化」を支持していたことを承知するものの、国際貿易よりもギルド制の廃止など国内経済の「自由化」を重視していたという。一方、テュルゴーは、グルネーの意を容れてウェールズ出身の牧師・宗教家ジョサイア・タッカーの自由貿易論をフランスに紹介している。

なお余談ながら、わが国において“Laissez-faire, laissez-passer”（自由放任）をグルネーの作と伝えるテキストがあると聞き及ぶも、前の二文字“laissez-faire”は18世紀前半に活躍した開明的な行政官アルジャンソン侯爵ルネ＝ルイ・ド・ヴォワイエ・ド・ポルミーのネオロジスムであり、グルネーはこれに“laissez-passer”の二文字を加えたというのが正しいようである。

このように考えられるとすれば、テュルゴーがアダム・スミス学説を用意したケネー一門の有力メンバーなどではなく、グルネーゆずりの資本理論によって近代商業社会の理論分析に新境地を切り拓いた人物というべきである。スミスは1766年にパリに赴くさい、同郷（スコットランド）の先人デイヴィッド・ヒュームらのアドバイスを容れて出会ったテュルゴーから“capital”を伝授されたことはもとより、かれの手を借りて価格メカニズム、利子、租税など、フランスではよく知られた議論を見知ったのである。このことはスミス書簡や『国富論（*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*）』の記述からもうかがい知ることができる。

2. テュルゴーの経済思想史上の評価——経済学における「言語と文法」

以上みてきたように、テュルゴーが、ケネーとその一門のその系譜に属さない、あるいはオーギュスト・ブショアの喝破するように「フィジオクラート派とは一線を劃する」思想家であり、そして『諸省察』がその名にふさわしい斬新なテキストであったとすれば、わが国で第2次世界大戦前から語られてきたテュルゴーがフィジオクラート派の有力メンバーで、かつ『諸省察』が「重農學派よりアダム、スミスへの過渡期の最大著作」であるとか、「ヴォルテールの同時代人であり、重農學派の完成者」であるといったような評価が妥当でな

かったことは明白である。はたしてそうであるとすれば、カール・マルクスが、盟友フリードリヒ・エンゲルスの著書『反デューリング論』の欄外注でオイゲン・デューリングを引用して「テュルゴーとともに、フィジオクラシーは実践的にも理論的にも終焉していた」¹⁴⁾ といったテュルゴーの経済思想史上の解釈に関してもあらためて検討する必要があると考えられる。

要するにわが国では、テュルゴー理論がいかに優れていようが、ケネー理論の枠内においてそのようにいえるのであって、詰まるところアダム・スミスの『国富論』の誕生を準備する要素の一つであり、フィジオクラシーの「終焉」は「スミス以前」の学問的営みの終焉にほかならない。ただし、テュルゴーは「最後のフィジオクラート派」であり、スミス『国富論』の登場こそは経済学の新たな歴史のはじまり、いわゆる「スミス後」の経済学——古典経済学の時代を告げるものであるという解釈が久しく無批判的に受け容れてきたのである。〈重商主義→フィジオクラシー→アダム・スミス学説と古典経済学の成立〉という経済思想史の、短絡思考を絵に描いたようなフローチャートを疑問の余地なく受け容れるに至ったのはその帰結であった。

結論を先取りしていえば、このフローチャートは、スミスの『国富論』第4篇「経済学の諸体系 (systems)」の議論を是とすることを大前提としている。つまり、スミスはかれ以前の「諸体系」もしくは「諸学説」の誤りを正し乗り越えつつ独自の経済学体系を確立し得たというのである。後世の経済学者は、立場こそ違っても大筋としてスミス流の経済思想史のフローチャートを肯定的に受け止めこれを「正当化」する語句を修飾・彫琢してきたといつてよい¹⁵⁾。

14) Marx [1877], p. 1525. なお、マルクスのテュルゴーの解釈については、中川 [2013] もあわせて参照されたい。

15) スミスの名誉のために一言申し添えておくと、ご同類は決してすくなくない。例えば、カール・マルクスやフリードリヒ・エンゲルスにしてからが、自らは経済学ではサー・ウィリアム・ベティにはじまりアダム・スミス、デイヴィッド・リカードウによって頂点を迎える古典経済学の後継者であり、社会主義思想では、シャルル・フーリエ、クロード・サン＝シモン、ロバート・オーウェンらの初期の「空想 (utopia)」的社会主義を批判し乗り越えて「科学 (science)」によって社会主義の到来を証明したと豪語した。「科学的社会主義」のゆえんである。だがマルクスは、師と仰ぐリカードウが『経済学及び課税の原理 (The Principles of Political Economy and Taxation)』

もっともこれを立ち入ってみていくと、重商主義にしろ、フィジオクラシーにしろ、それが何を意味するのかという段になると経済思想史家のなかにいわれるほどの「共通認識」が存在せず、ために異なる解釈が生まれてきた。なかでも重商主義がそうであり、その最大のポイントは、それがあたかも経済理論の「学派 (secte)」と考えられてきたところにある。しかし、スミスは「経済学の諸体系」の一つとして重商主義を批判するも明示的に「学派」とは断じていないように見受けられる。それにもかかわらず、後世の経済学者たち——マルクスをふくむ——はスミスをいわば“御輿”に見立てて重商主義「学派」を論難した気になっていたように思われる。

ところが近年、重商主義の主張は経済理論ではなく、国家の経済政策を正当化する政治思想であり、17世紀後半このかた主要にはイギリス、フランスにおいてこの種のテキストがあまた発表されたことをもってただちに「学派」を形成したとはいえないとする研究者が散見されるようになった¹⁶⁾。フランスを例にとれば、国家の経済介入や保護主義の代名詞となったジャン＝バティスト・コルベールやジャン・ボーダンのほか、「経済学」を意味する *Economie politique* というネオロジスムの生みの親アントワヌ・ド・モンクレティアン、テュルゴーの師ヴァンサン・ド・グルネーまでもが代表的な重商主義者と見做されている¹⁷⁾。

のなかでテュルゴーをはじめ、サー・ジェイムズ・スチュアート、アダム・スミス、ジャン＝バティスト・セー、シモン・ド・シスモンディらの著作によって、経済学は「大いに進歩させられた」(Ricard [1817], p. 5. 訳5ページ) といっていることにまったく言及していない。また、マルクス＝エンゲルスが「空想的」というタームに対比させた「科学的」とは、ありていにいえば、「史的唯物論 (historischer Materialismus)」にもとづく唯物論的歴史観——唯物史観のことである。当のマルクスよりも、後世のマルクス主義者は唯物史観により資本主義から社会主義への移行を証明したというのであるが、唯物史観は一つの「思想 (cogitatio)」であっても「科学 (scientia)」ではないとする向きがすくないことをここで記しておきたい。

16) オランダの経済思想史家アンヌ＝クレール・ホイニングは、ラース・マグヌソンの『重商主義 (Mercantilism)』(1994) に倣って重商主義を「17世紀後葉から18世紀初頭にかけての政治的・経済的状況のなかでイギリスやフランスで発表された一連の出版物」に見られる主張であって、「経済学の流派 (école économique)」とは考えてはいない (Hoyng [2015], p. 71)。

17) この点については、さしあたり、中川 [2019a], 22-4 ページを参照されたい。このうちグルネーについては、20世紀初頭に「穏健な保護主義者」と捉えるドイツ西南

かたやブリテン島では、サー・ウィリアム・ペティ、サー・ジョサイア・チャイルド、それにアダム・スミスと同様スコットランド出身のジョン・ローやサー・ジェイムズ・スチュアートらの名前を思い浮かべる者もあろう。このほかにも、アイルランド出身ながらフランス国籍を取得したりシャル・カンティヨンも重商主義者であるが、久保田明光によって「フィジオクラート派成立直前の先駆的重商主義者」¹⁸⁾との評価をあたえられたほか、ウィリアム・スタンレー・ジェヴォンズは「経済学の真に科学的学派」の開祖スミスの「思想的源泉」、スミス学説の基礎の一つをなしていると結論づけた¹⁹⁾。

それではスミスはこれらの思想家のどれをもって重商主義と見做したのであろうか。それというのも、うえて紹介した思想家・経済学者たちに限ってみても、その説くところが種々異なるからである。実際このほかにも、アメリカの経済学者ロバート・V. イーグリーはスコットランド出身の銀行家ジョン・ローを「紙幣重商主義者 (paper-money mercantilist)」²⁰⁾と呼ばわるが、商業政策や保護政策をもって重商主義と定義するのとは明らかに違っている。しかしより重要なことは、スミス学派をもって自他とも任じる後継者たちが「重商主義者」のレッテルを貼ったチャイルドやスチュアートには一言も言及していないのはなぜか——ということである。かれらの一体全体どこが「重商主義者」なのか、スミス自身一言も発していないにもかかわらずかれの後継者を自称する者たち

の古都ハイデルブルク出身の経済学者アウグスト・オンケンと、自由主義的傾向の経済学者と見做すギユスターヴ・シェルとの間で論争がなされたほか、「フランス思想史上初のフィジオクラート」すくなくとも「ケネーに近い思想の持ち主」との評もある。あるいはジル・ドスタレールのように「自由主義のパイオニアで保護主義者」という者もある。ことほどさように、グルネーの評価については定説が存在しない。この点については、Dostaler [2010b]; Murphy [1986] もあわせて参照されたい。

18) 久保田 [1955; 1965] を参照されたい。

19) Jevons [1881], p. 342. 訳 72 ページ。筆者はジェヴォンズの所説を論難したことがあるが、スミスがイングランドに吸収・合併されたスコットランド出身であることをもってイングランドを「経済学の国籍」(Idem, p. 341. 訳 92 ページ)というに至っては、勢いあまったのであろうが、ウルトラ国粋主義者のジェヴォンズの与太話と見付け相手にしないこととした。

20) Eagly [1974], p. 8. イーグリーの所説については、中川 [2011] (とくに第2部第5章「ジョン・ローのマクロ経済分析研究——イーグリーの所説を中心に——」)を参照されたい。

はそう断言するのである。

もっともスミスがスチュアートに言及しないのは、スミスがスチュアートの名著『経済学原理 (*An Inquiry into the Principles of Political Economy*)』に学ぶところが大きであったがこれを隠したからであって、スミスによる「作為的なスチュアート隠し (purposed neglect of Steuart)」と断じる研究者も決してすくなくない²¹⁾。のみならず、ペティ、チャイルドに至っては、その著作はもとより名前さえ登場しない。これを要約すれば、スミスによる重商主義批判は自説の補強というよりは、むしろ先人たちを貶めることによって自説の優越性を正当化するためのレトリックであったと考えるほうが分かりやすい。島崎藤村の口上に倣えば「御方便なものだ」——である。

ただスミスの名誉のために一言申し添えておくなら、18世紀は自余の書物からの引用を明記する義務を負うことがなかったし、またことほどさように、テュルゴーにしても、『諸省察』のなかでフランソワ・ケネーの創意である「純生産物」に言及する時、ケネーの名前を明記していない。「盗用」、「剽窃」とは御大層な物言いと反撥を招くかもしれない。

はたしてそうであるとしても、スミスがブリテン島土着の“stock”と並行して舶来のラテン語を語源とする“capital”というタームを「資本」の意味で用いるさい、テュルゴーの名前を明記しないのはいかがなものか。それとともに忘れてはならないことは、テュルゴーが「ケネーの愛弟子」、「フィジオクラート派」の有力なメンバーでかつ「ケネー理論の完成者」であったのかということである。この点は重要である。すなわち、うえてみた経済思想史や経済学史のフローチャートにいう〈重商主義→フィジオクラシー→スミス学説と古典経済学成立〉は、テュルゴーの経済理論がフィジオクラシーに吸収されることが大前提となっているが、この大前提がもしも崩れるとすれば、われわれの慣れ親しんだあまりにシェーマティッシュなフローチャートが成立しなくなるのは理の当然である。もちろん反論が予想されるも、そのように主張するのであれば、まずもっ

21) いわゆる「スチュアート隠し」については、さしあたり、Rashid [1986]; 馬場 [2008] を参照されたい。

で疑義照会くらいはすべきであろう。

結論を急ごう。佐藤公俊氏の拙著『テュルゴーとアダム・スミス』の書評のなかでかなりのスペースを割いて論じておられるので、ここではさしあたりつぎの点だけ指摘しておきたい。すなわち、テュルゴーの言葉に倣えば、かれのケネーに対する立ち位置とスミスのそれとの違いであり、両者は一見するとあたかも同じ経済学の「言語 (langage)」と「文法 (grammaire)」に即して説いているように見えながらも、たがいに違う方向に向かっている。テュルゴーのいわゆる「言語」とは事物や事象の概念や定義、「文法」とはこれらを使いこなす手順や方法であるが、以下でみるように、これらが異なるということはまったくの別物との謂いにほかならない。

ただテュルゴーのケネーに対するスタンスは複雑で、その説明は難儀そのものである。周知のように、テュルゴーはケネーの主宰するヴェルサイユ宮殿の中二階 (entresol) のサロンにたびたび足を運んでいたからサロンの主には好意的であったと推察される。例えば、テュルゴーは1766年2月、友人のデュボンに宛てた書簡のなかで「わたしはこれらふたりの人間〔グルネーとケネー〕の弟子であったことを生涯の誉れとするものである」²²⁾と書きはした。けれども、テュルゴーのケネー評価は巷間伝えられるように『経済表 (Tableau économique)』それ自体にあるのではなく、デュボンに送った同じ書簡にあるように、じつは「これらふたりの人間」がともに「商業の競争と自由の原理」を尊重していたところにある。これをテュルゴーの言葉に即していい換えれば、「〔商業の競争と自由の〕原理は、そろばん (comptoir) より出発したグルネー氏をして、鋤 (charrue) より出発したケネー氏と同じ結論に到達させた」²³⁾ということである。

ところが、テュルゴーが1771年2月15日に同じくデュボンに宛てた書簡にはつぎのようなくだりがある。すなわち、「不幸にして、ふたりの巨匠〔ケネーとミラボー侯爵〕は言語 (langage) と文法 (grammaire) [中略] の分析には秀でた

22) Turgot [1766a], p. 506.

23) Idem.

成果を残していません。これらを論ずるには、セクト主義 (esprit de secte) の忌み嫌う tabula rasa (精神の白紙状態) でなくてはなりません²⁴⁾。ここでテュルゴーのいう「セクト主義」とは、フィジオクラシーの謂いである。

テュルゴーがかくいうのは、友人のデュボンによる『諸省察』の原稿を著者に無断で手を入れ内容を改竄したことを指摘しなければならない。たしかに、テュルゴーの原稿をフィジオクラート派の機関誌『市民日誌 (L'Éphéméride du citoyen)』に発表するよう勧めたのは、ニコラ・ボードー神父の後任として当時同誌の編集に携わったデュボンであった。しかし、かれは掲載にさいして著者に無断で原稿の中身を書き改めたため、テュルゴーは1770年3月デュボンに宛てた書簡の中で怒りをあらわにしたばかりか、同誌に掲載されたテキストではなく、改竄される以前の“オリジナル”原稿の「抜刷 (tirage à part)」150部を別途作成し、これを著者自ら作成した送付先に寄贈することを要求している²⁵⁾。

そうしたいきさつを念頭に置いて、いま一度上記1771年2月テュルゴーがデュボンに宛てた書簡の行間にあらためて目を落とすなら、わが手塚 (寿郎) 教授のいわゆる「テュルゴーの批判の矛先は“TABULARASA (TABVLARASA)”を忌み嫌うフィジオクラート派の面々を越えてケネーその人にも向けられるようになった²⁶⁾」のパラグラフは言い得て妙である。ケネーとフィジオクラート派最良では人後に落ちないヨーゼフ・アロイス・シュンペーターは、かれの死

24) Turgot [1771], p. 474. ちなみに、テュルゴーはデュボンをはじめとするケネー門を「セクト (secte)」, その教義を「セクト主義 (esprit de secte)」と呼ばわっても、「フィジオクラート派 (physiocrates)」, 「フィジオクラシー (Physiocracie)」とはいわない。かたや、わが国では「エコノミスト (économiste)」をフィジオクラート派の別称と考えることを習い性とするようであるが、かならずしもそうではない。ばかりか、テュルゴーは「エコノミスト」というタームを用いたことは一度もなく、例えばデイヴィッド・ヒュームに宛てた1766年7月23日付書簡では「経済哲学者 (philosophe économique)」と称している。テュルゴーの曰く、「われらが経済哲学者たち、つまり [フランソワ・] ケネーの信奉者たちは、開祖の学説を熱烈に支持するでしょう」Turgot [1766b], p. 495)。ちなみに念のため付言するなら、当時“philosophe”とは、哲学者のほか、不逞の輩、不満分子、反抗的な人物という語義を有していた。詰まるところ為政者からみれば、“persona non grata (好ましからざる人物)”にほかならない。

25) Turgot [1771], pp. 382-3.

26) 手塚 [1933], 6 ページ。

後『経済分析の歴史 (*History of Economic Analysis*)』のタイトルで出版された私的な読書ノート (未定稿) のなかで、「テュルゴーはフィジオクラート派ではなかったが、シンパシーを抱いていた」²⁷⁾ といったものだが、仮にもしかれの言い分が正しいとすれば、デュボンによる『諸省察』の改竄はテュルゴーの「シンパシー」を失わせしめる衝撃的かつ決定的な“事件”であったというべきであろう。

はたしてそうであったとしても、テュルゴーとケネーやフィジオクラート派との間のある溝は1770年代以前にも存在しており、この点を考慮に入れるならば、テュルゴーはケネーから一步退いた立ち位置を保っていたことがはっきりする。「自然秩序 (*ordre naturel*)」の受容がそれである。すなわち、「自然秩序」はテュルゴーの受け容れるところとならなかったばかりか、ケネーや一門の金科玉条とするアイデアからは一步も二歩も距離を置いていた。その意味からすれば、フランス東部のメス大学で言語学を講義していたジャンヌ・ギャレ＝アモノのつぎの一句は至言である。すなわち、

[テュルゴーは] フィジオクラート派の金科玉条とする自然秩序という思想を放棄し、代わりに[リシャール・]カンティヨンが人間の「欲求 (*besoin*)」から生まれる「[商品の] 交換 (*échange*)」と呼ぶアイデア [中略] の助けを借りて「人間社会 (*sociétés d'hommes*)」という機構を解明する [ことを試みた]²⁸⁾。

しかるに、アダム・スミスが『国富論』第4篇第9章において、ケネーの「農業システム」を誤った学説と切り捨てて一方で、同時に「[ケネーの学説は] おそらくこれまでに発表されたもののうちで、最も真理にせまったものであり、またそれゆえに、このきわめて重要な科学の諸原理を細心に検討しようとするすべての人々の考慮に十分値する」²⁹⁾ といってケネーの「自然秩序」論を擁護

27) Schumpeter [1954], p. 244.

28) Gallais-Hamonno [1982], p. 82. また、Hoyng [2012] もあわせて参照されたい。

29) Smith [1776], p. 627. 訳 465 ページ。

したのと比較すれば、テュルゴーの立ち位置はスミスのそれとは決定的に異なる。いや、好対照というべきである。かれにとって大切なのは、哲学、すなわち形而上学的思考とそのための「言語と文法」であり、そのスタイルは“TABULARASA”すなわち精神の白紙状態、したがってまた徹底した抽象化と概念構成による論理整合性の追求であった。わが手塚教授のいうように、テュルゴーが「フィジokrat派の面々を跳び越えてケネーその人」をも批判の対象としたのは、フィジokrat派の面々が形而上学的思考を忌み嫌い自然秩序というアイディアに拘泥したからにほかならない。

ここにテュルゴーと、かれから経済学の「言語」と「文法」を学びつつも最終的に異なる方向を歩んだアダム・スミスとを分かち淵源がある。そしてそれをさらにつき詰めていえば、18世紀経済学の揺籃期における二人の偉人における「学問としての経済学」の目標と本性に関する理解の相違となって立ちあらわれることになる。つまり、テュルゴーにとって経済学はあくまでも商業社会という世俗社会を解明することを目指した学問であり、それを解明するための「言語」と「文法」には「神」はもとより「倫理」や「道徳」が介在する余地は1平方耗といえどもなかった。

言葉を変えていえば、テュルゴーが“演繹の女王”こと修道女フィデルマばりの演繹的手法による解明に徹したのに対して、スミスの場合にはテュルゴーほどの割り切りがなかったとみてよい。すくなくともスミス研究学者はそうのように考え、かつその差を説いてみせるために経済学と道徳・倫理学との間に介在する符合と異同を究明することになる。いわゆる「アダム・スミス問題 (Adam Smith problem)」である。

3. 学問としての経済学の目標と本性——経済学はモラル・サイエンスか？

テュルゴーとアダム・スミスのフランソワ・ケネーに対する立ち位置の相違は、ただ単に経済思想にとどまることなく、経済学の「学問としての目標と本性」をどう考えるかという、より根源的な問題の解明をも要請することになる。

そのさいのキーワードは「モラル・サイエンス (moral science)」もしくは「道徳的实践 (moralisme)」であり、「経済学はモラル・サイエンスである」という命題が成立するかどうかを問うことである。そしてそれはまた究極的には「アダム・スミス問題」への回答といい換えてもよい。

結論を先取りすれば、筆者は経済学を「モラル・サイエンスではない」と考えるものである。これを解き明かすうえで、ブルーノ・アマブルとステファノ・パロンバリーニの共著『経済学はモラル・サイエンスではない (*L'économie politique n'est pas une science morale*)』は示唆に富むと考えるものであるが、このことはのちに立ち返ることにしよう。その前にさしあたってつぎの点を指摘しておきたい。

すなわち、経済思想や経済学の研究史をふり返ると、経済学の対象は近代商業社会ないし市場経済(または商品経済)社会であり、市場経済が対象とするのは人間の生活の営みである。およそ人間の生活は、たとえ生産や消費であろうと、祭祀や民俗芸能と同じように、社会の脈絡とふかく関わっているはずである。ところが、市場経済という人間の営みは社会のもつ脈絡から自らを解放し、かつこれを意識化し言語化(理論化)して独自の生活スタイルを確立しようとする。それは「商品を安く買って高く売る」という地上のどの国でも共通する生活スタイルであり、市場経済の普遍性といえるかもしれない。

ことほどさように、経済学は、これを研究する人間たちが意識するしないにかかわらず、市場経済の独自の生活スタイルの解明を旨として発展してきた。別言すれば、経済学が一義的に目標としてきたのは市場経済ないし商品経済の普遍性としての市場原理、その要諦をなす「新しい富」としての資本の分析であった。テュルゴーが喝破したとおり、市場経済では資本が富の形成と分配の、したがってまた諸商品の生産と流通の主たる担い手として人間の営みや人間と人間との関係を律するからにほかならない。

もっとも歴史をふり返れば、市場経済の実際あるいはその現実的生存形態は「資本主義 (Kapitalismus)」³⁰⁾ と称される経済システムであり、そして資本主義

30) 本文で紹介したように「資本 (capital)」, 「資本家 (capitaliste)」は、いずれもテュ

が経済システムたり得るには一国の法律やルールによってかたちづくられることを必要とする³¹⁾。それゆえ、市場経済が現実生存するには、一国のもつ土着性や民族性や国民性から自由であることはできない。ここに、経済学が市場経済の普遍性を解き明かす原理的研究を踏まえて、その現実生存形態としての資本主義的市場経済の歴史や現状の分析を要請されるベースがある。

既述するように、テュルゴーの代表作『諸省察』は師ヴァンサン・ド・グルネーゆずりの資本を軸に市場経済の「言語」と「文法」を論じた古典的名著の誉れ高いテキストである。それは、徹底した抽象化と概念構成とによる論理整合性を追求する分析手法の成果を示すものであるが、リシャール・カンティヨンが『商業論説』で披瀝した演繹的手法を大筋として踏襲したとあってよい。

はたしてそのようにいえるならば、経済学と「モラル・サイエンス」とは没交渉と考えねばならない。すくなくとも、市場経済の本質規定と倫理や道徳とが同一レベルで議論できるとは考えられないし、そもそも倫理や道徳が市場経済と同じように抽象的な本質規定、すなわち原理 (principles) を有するかどうかははなはだ疑問といわなくてはならない。だが、それにもかかわらず経済思想史家や経済学史家が「モラル・サイエンス」に惑溺するのは、スコットランド出身の倫理学者アダム・スミスが経済学のテキストをものしたからである。別

ルゴーがグルネーのアイデアを発展させた概念であるが、「資本主義 (Kapitalismus)」というタームの出自ははまだ謎であり、いつ、どこで、だれがどういふしだいで使いはじめたか分っていない。マックス・ヴェーバーの『プロテスタントの倫理と資本主義の精神 (Die protestantische Ethik und der 'Geist' des Kapitalismus)』(1904-5)は「資本主義」というタームを用いた初期の著作の一つであり、かれはこれをヴェルナー・ゾンバルトの代表作『近代資本主義 (Der moderne Kapitalismus)』(1902)から借りたと示唆しているが、戦後間もなく発表された小原啓士の代表作『近代資本主義の範疇』はある程度までヴェーバー説を裏書きするものである(小原[1948])。はたしてそうであるとすれば、マルクスの諸著作のなかにフランス語の“société civile (市民社会)”に相当する“bürgerliche Gesellschaft”というタームが登場しても、“Kapitalismus”という用語に御目文字叶わないのは理の当然である。このタームはマルクス存命中に誕生したものではないからである。ちなみに、マルクスの諸著作なかんづく『資本論』における“Kapitalistische Produktion”は「資本家的生産」と訳するのが筋で、「資本主義的生産」は明かな間違いというべきである。

31) この点については、さしあたり、小原[1948]、池田[2001]、中川[2017]を参照されたい。

言すれば、『道徳情操論 (*The Theory of Moral Sentiments*)』と『国富論』との間に交渉があるとする立場からの立論であり、世にいう「アダム・スミス問題」の淵源がここにある。ここで「淵源」というのは、太古の昔からのテーマと切り離せないからである。という意味はこうである。

すなわちユダヤ教徒はもとより、キリスト教徒、ムスリム教徒に共通の経典 PENTATHEVCVS (モーセ五書) の一書 EXODVS (出エジプト記) 第20章2節から17節の、“Non habebis deos alienos coram me (汝、我の^{ほか}外いかなるものをも神と為すこと勿れ)” にはじまる“Decalogus (十戒)” は、道徳や倫理の原理を説いた最古の教義の一つという見方が、それである(ここでの記述は DEVTERONOMICVM (申命記) 第5章6節から21節にも見える)。だが、牽強付会とはこのことである。いまは道徳や倫理がそれに固有の原理を有するかどうか議論の余地があることはこれを脇に措くとしよう。要は、モーセが神から授かり石板に刻み付けた言葉は倫理や道徳の原理すなわち根本法則などではなく、その一部をなす戒律 (præcepta) であった。これに対して、敬虔なカトリック教徒のテュルゴーが『諸省察』で解き明かそうとしたものこそ戒律ではなく、市場経済ないし商品経済の原理すなわち根本法則であった。

結論を急げば、『道徳情操論』と『国富論』したがってまた倫理学(または道徳哲学)と経済学とではそれを律する「言語」と「文法」が異なり、両者の間の連絡や交渉はないと考える。それは、経済学の対象である市場経済の本質規定を論じる原理論あるいはミクロ経済学にあつてそういえるだけでなく、資本主義と称する経済システムの歴史や現状の分析またはマクロ経済学においても、市場が倫理や道徳を、したがってまた「モラル・サイエンス」や「道徳的实践」を要請する合理的根拠 (rationalis) は何一つないからにはほかならない。そしてそのようないえるならば、「アダム・スミス問題」の解は、そもそもそのような「問題」自体が成立しないという以外にあり得ないと考えるのが筋である。

以上のことは、佐藤公俊氏に取り上げてくださった拙著『テュルゴーとアダム・スミス』(とくに付論『資本』概念生成・成立再論)で論じたことがあるので、ここでは冗長にならない程度にすなわち簡潔に再論しようと思う。その

最大のポイントは、テュルゴーの『諸省察』はもとより、スミスの『国富論』の最初の2篇では市場経済の本質規定を論じており、いうなれば論理整合性の追求であるがゆえに、個別具体的かつ現実的的事象は倫理や道徳あるいは宗教といえども捨象されているとみななければならないという点にある。

例えば、カンティヨンは『商業論説』第1部第13章において企業者を「自ら危険を冒して」「諸商品の生産、交換、流通を行う」経済主体と定義する一方で、「世間では、企業者とはなべて、その職業上可能なことはなんでもごまかし、また顧客にいっぱい食わせようとする連中と考えられている」といっている。しかし、そのことを論ずることは「本書〔『商業論説』〕の主題ではない」とのべたあと、かれはこういつてこの章を結んでいる。すなわち、企業者の定義こそがここでの一義的な関心事であるから「私〔カンティヨン〕はこのことを原理として確立したい」³²⁾。これこそ、原理追求の“模範”とすべきところである。

それでは現実世界ではどうであろうか。市場経済の現実的生存形態である資本主義の世界においてこそ、倫理や道徳は経済主体の経済活動とともに論じられるべきであろうか。この点を考察するうえで有益と考えられるのは、かつて“ヘッジファンドの総帥”、“ヴァンダルの王”と恐れられたハンガリー出身のアメリカ人投資家にして慈善事業家のジョージ・ソロスの『朝日新聞』とのインタビューである。ソロスの曰く、「市場参加者として、市場で利益を上げること」に注力したことは不道徳なことではない。市場というところは道徳が支配しているところではない〔からである〕。ただし、私はつねに〔市場の〕ルールに沿って行動してきたし、ルールを改善することにも関心をもってきた」（『朝日新聞』2006年10月18日付）。これは、経済学と倫理学（またはモラル・サイエンス）の「言語」と「文法」の相違を、ソロスの感情に左右されない冷静な目から見言い表したものと考えてよい。

テュルゴーに市場経済の抽象的な原理規定ないし本質規定とその現実的生存形態であるところの資本主義的市場経済の分析とを分かち方法的理解があったのかと問われると、正直、心もとない。だが仮に両者を意識的に分かち方法論

32) Cantillon [1755], p. 31.

を有していなかったとしても、つぎのような理由によりテュルゴーは両者を混同する愚から自由であった。それは、わが手塚教授のいわゆる「セクト主義の思想〔フィジオクラシー〕が忌み嫌った」ところの“TABULARASA”，すなわち「精神の白紙状態」からスタートする分析手法をよくし、さながら真っ白なキャンバスに向かって絵筆を走らせるように、実際にはあり得ない「抽象的なもの」から「具体的なもの」へと一つ一つ手順を踏んで分析する演繹の方法を心得ていたことの賜物といってよい。かくいうのは、テュルゴーが師ヴァンサン・ド・グルネーとかれの協力者によるカンティヨンの『商業論説』の原稿の校訂・編集・出版作業に直接的または間接的に関わり、アイルランド出身の稀代の国際銀行家が好んで用いた演繹法を見知っていたからである。

さらにいえば、テュルゴーはプライベートでは敬虔なカトリック教徒ではあったが、学問の分野では世俗主義を貫き無暗矢鱈と「神 (YHV(W)H)」の御名を口にしなかった。その際立った事例が、リシャール・カンティヨンを嚆矢とする「価格メカニズム」と「社会的資源の適正配分」に関する議論である。という意味はこうである——。テュルゴーがカンティヨンに倣って企業者による市場調節が均衡価格へと導くとする一方で、スミスは『国富論』第4篇第2章において「見えざる手 (invisible hand)」に導かれて市場調節と社会的資源の適正配分が実現されるという。スミスの曰く、「見えざる手に導かれて、自らは意図していなかった一目的〔社会一般の利益の増進〕を促進することになる」³³⁾。対するカンティヨンやテュルゴーであるが、たとえていえば「企業者の見える手」によって市場調節が行われると説く。つまり、あくまでも人為的な業だというのである。

ちなみに、いうところの「見えざる手」はスミスの創作ではなく、18世紀半ばに在フランス王国ナポリ王国大使館に赴任した外交官フェルディナンド・ガリアーニの作といわれる『貨幣論 (Della Moneta)』第1篇第3章にみえる「いと高きところの御手 (La Suprema Mano)」にヒントがあったとされる。ありてい

33) Smith [1776], p. 423. 訳 388 ページ。

にいえば、ガリアーニ版“*manus invisibilis Dei*”すなわち“神の見えざる手”にはかならない³⁴⁾。さりながら、テュルゴーの与るところではない。

以上要約すれば、経済学はその生成・発展のプロセスにおいて、市場経済の本質規定をなす原理論ないしミクロレベルにあって倫理や道徳の影響の痕跡さえ認めることができないばかりか、市場経済の現実的生存形態としての資本主義的市場経済の分析ないしマクロ経済分析においても「経済学はモラル・サイエンスである」とする合理的論拠を見出すことが可能とは思われない。このことは、テュルゴーに限った話ではなく、『道徳情操論』の著者であるアダム・スミスにあってもしるはずである。くり返すが、経済学と倫理・道徳とはそれを律する「言語」と「文法」が異なることを肝に銘じる必要がある。

だが、このような経済学の考え方に対して反論があることもまた事実である。例えばアマルティア・センのように、経済学とは「人間はいかに生きるべきか」、「そのためには何をすべきか」を追求する学問という考え方である。それによると、経済学は行動のモチベーションの倫理性とそれを達成する(佳き)手段を追求する「モラル・サイエンス」であり、そこでは新古典派経済学によってスポイルされた人間の「共感」や「関係性」や「利他性」にこたえつつ経済学の「再生」を実現するというのである³⁵⁾。

センはそのためにマクロ経済学にとどまらず、ソシオ・エコノミックス、経済哲学など社会科学だけでなく人文科学、工学や倫理学との連携を謳っている。しかしながら、マクロ経済分析の根底にある市場経済の本質規定については主流派経済学を踏襲し、これに異を唱えることはない。センが新古典派マクロ経済学批判でみせた鋭い舌鋒が、ミクロレベルでは鳴りを潜めた感のあるのもそのためであろう。

34) ガリアーニはかれ独自の「主観価値論」による価値・価格論を展開したことでも知られるが、人間の営みは最終的には「いと高きところの御手」によってしかるべきところへと導かれるという。ガリアーニのいわゆる「いと高きところ」とは、YHV(W)HまたはDeus(神)のおわしますところといい換えることが可能であろう。以上、さしあたり、中川 [2019a] を参照されたい。

35) センの経済学的主張を理解するには、Sen [1987] が簡便である。

一見して斬新に見えるセン理論ではあるが、この間主流新古典派経済学の研究者のなかにもこれと似た考えの者が散見された。ただ新古典派学者がセンと異なるのは、主流派の主張が実際に政策として採用されるも、センのそれは受け容れられず成果らしい成果を残せなかったことである。そのようにいえるのであれば、保守本流を自認する米経済紙『ウォール・ストリート・ジャーナル (Wall Street Journal)』のある記者がアマルティア・センの主張をとらえて旧ソ連の十八番「アジプロ (agitation-propaganda)」の焼き直しと痛罵したのは、当然といえども遠からずというべきであろう。ありていにいえば、センの主張は言葉が踊っているだけ——との謂いである。

だからというのではないけれども、先に紹介したブルーノ・アマブルとステファノ・パロンバリーニの著作のタイトル「経済学はモラル・サイエンスではない」は、言い得て妙である³⁶⁾。はたしてセンの主張が現実政治でどこまで採り入れられ、その有効性を発揮できるかどうかは定かではない。かくいうのは、シンの新古典派マクロ経済学批判がある程度まで支持できるからであるが、しかし返す刀でミクロ経済学を批判の対象にしなかったのはなぜだろうか——行動経済学による新古典派ミクロ経済学批判の有効性が一定程度認められつつあることを思えば、この面でのアマルティア・センの沈黙は解せない。

いま事がそのようであれば、アマブル=パロンバリーニの「経済学はモラル・サイエンスではない」は、アマルティア・センに限らず、政治学や社会学やソシエオ・エコノミックスと倫理学や道徳哲学や工学などを「総合」した「モラル・サイエンス」、したがってまた新手の「道徳的实践」への経済学批判といってよい。なかんづく、一見すると人間社会において「ニュートラル (neutralis)」にみえる工学や倫理・道徳を経済分析ツールとして取り込むことによって新規性を装っていることへの非を告発し論難している。

それもそのはず、本書の二人の著者はレギュラシオン学派 (École de la régulation)、コンヴァンション学派 (École de l'économie des conventions) に近いマクロ

36) 以下で取り上げるアマブル=パロンバリーニの主張は、主に Amable et Palombarini [2005] による。

経済の学究、とくに現代資本主義研究の専門家たちである以上、当然といえば当然である。そしてそのアマブル＝パロンバリーニが危惧するのは、セン一流の議論によって現実世界における失業、貧困、人種や性や年齢の差別が生み出した経済格差などに起因する一連のコンフリクトがその固有の社会的コンテクストから切り離され、倫理や道德の問題に拘り替えられ、拳句はこれらの諸問題に対する政治的・経済的・社会的責任が免罪されかねないところにある。経済学や社会科学の研究にモラル・サイエンスを持ち込むこと、したがってまたモラリズムへの回帰は、畢竟、経済学ひいては社会科学全般にモラル・ハザード (hazard moral / moral hazard) を持ち込むだけといえないこともない。

筆者はアマブル＝パロンバリーニの議論に全面的に同意するものではないが、かれらの問題処理・解決における社会科学や経済学の役割を踏まえた「契約と選択 (conventions et choix)」の理論にはある程度まで共感できる。ここで「ある程度まで」と断りを入れた一半の理由は、コンヴァンション派の二人の論客もまた、経済学の本質規定をどのように考えているか不明であるというところにある。マクロ経済分析を旨とする以上、やむをえないのかもしれない。かれらはレギュレーション派にもシンパシーを抱いているから、新古典派ミクロ経済学には与しないかもしれないがしかと判断できなかった。この点は、日を改めて検討することにしたい。ここではアマブル＝パロンバリーニの議論が「経済学はモラル・サイエンスである」という命題の批判的検討のための有力な手掛かりを提供するものであったということが分ったことをもってさしあたりよしとしなければならない。

結すびにかえて

佐藤公俊氏のオーダーにもとづき、オーナー男爵アンヌ・ロベール・ジャック・テュルゴーの経済理論の評価と経済思想史上の位置について論じてきた。関連するテーマはこの間何度か発表してきたものの、テュルゴーとケネーおよびかれの一門との関係、テュルゴーとアダム・スミスとの関連について言及し

たうえでテュルゴー理論の歴史的評価を下すとならばと思つたよりは難儀であつた。しかしながら、この場で従前事実上棚上げしていた「経済学はモラル・サイエンスである」という命題に対して批判的検討を加えることができたことは、それがたとえさやかではあるとしても、一歩前進と考えている。

一つテュルゴーを研究しはじめてから疑問に思つていたことがある。すなわち、カール・マルクスが引用したオイゲン・デューリングの一句「テュルゴーとともに、フィジオクラシーは実践的にも理論的にも終焉していた」を読んで、わが国ではだれ一人として批判はもとより疑問にさえ思わないという研究状況が長らく支配してきたことである。ここで「だれ一人」というのは、マルクス主義経済思想史家に限らず、新古典派経済思想史を専攻する研究者たちをもふくむ。最後にこの問題に関する筆者の考えを紹介して結びとしたい。

筆者がテュルゴーについての先入観や固定観念——サー・フランシス・ベーコンのいわゆる *Idola*——に囚われることがなかつたのは、幸か不幸かこの国でこれまで積み上げられたテュルゴー研究が皆無であつたからであると断言できる。実際、テュルゴーの研究書はおろか研究論文さえほとんどなく、ミステリーの口上に倣つて物言えば、テュルゴー理論成立の謎を解く手掛り (*clef de l'énigme*) は、唯一わが手塚(壽郎)教授の研究論文であつた。しかも、「翻訳大國ニッポン」といわれる割には、欧米諸国で古典的名著の誉れ高い『富の形成と分配に関する諸省察』が三度邦訳されるも、いずれもフランス語の出来不出来を云々する以前の——文豪・谷崎潤一郎が『文章讀本』において吐き捨てるようにいひつた「化け物」的日本語の見本のような——悪文であつたことが、わが国の経済学史や経済思想史の研究者たちをしてテュルゴーの評価を低からしめる一因となつたと思つてならない³⁷⁾。

しかるに筆者は当初からギュスターヴ・シェル編テュルゴー全集 (*Œuvres de Turgot et documents le concernant*) と首っ引きで、間違いだらけでチンプンカンプンの訳書とは無縁であつた。お蔭をもつて、筆者の研究が進むにつれて、わ

37) この点については、『経済学史研究』(第59巻第2号)に寄稿したアンヌ＝クレール・ホイニングの著作の書評(中川[2018])もあわせて参照されたい。

が国で「定説」化しているテュルゴーのステレオタイプのイメージが根柢からくつがえされていくのをじかに感じ取った。その最初の成果が拙著『ジョン・ローの虚像と実像』第1部第3章における「テュルゴー」論であり、これがやがて『テュルゴー資本理論研究』、『カンティヨン経済理論研究』、さらにはこのたびの『テュルゴーとアダム・スミス』のかたちで結実した。

さいわい筆者のテュルゴー論は佐藤公俊氏をはじめすくなくからぬ方がたの目に留まったものの、当初は経済学や経済思想史の分野よりもむしろ政治学や政治思想史の分野からの問い合わせが多かった。身分制議会の廃止、ギルド制の廃止と職業選択の自由、信教の自由、言論出版の自由、国王といえども納税義務ありとする租税改革、自由貿易の推奨といった改革案を携えて時の最高行政責任者である財務総監（今日の総理大臣に相当）を務めたテュルゴーこそは、もしもそれらがすべて実現されていたらならば、「革命」という手段に訴えることなく平和裡にフランス王国を変革し得たであろうとまでいわれる——「フランス革命を阻止できた行政官テュルゴー」と称されるゆえんである。そのうえしかも、時の国際関係を熟慮して「アメリカ独立戦争」に介入して宿敵イギリスの弱体化を図るといふ姑息な政治的立ち回りを拒否したことも忘れることはできない。

それにもかかわらず、わが国でのテュルゴーの経済学の分野ばかりか政治学の分野においても正当に評価されなかった一半の理由は、独断的思想、狭隘かつ硬直的なイデオロギーや革命幻想の弊に加えて、テュルゴーの一連の著作の誤訳が読者をミスリードする遠因となったといっても過言ではない。すなわち、経済学では、原田光三郎、永田清、津田内匠といったまったくの門外漢が翻訳を手掛けたところに致命的な問題があったが、政治・社会思想の分野でも、高名な思想史家の出口勇藏でさえ時にまともな訳をつけられなかった³⁸⁾。

38) テュルゴーは財務総監に就任した翌年（1775年）に国王ルイ16世に上奏した「国家組織改革私案（Mémoire sur les municipalités）」のなかで、つぎのようにいっている。すなわち、「人間の諸権利は、人間社会がこれまでに経験してきた種々さまざまな変遷や発展の経緯（histoire des hommes）にではなく、人間の本性（leur nature = nature des hommes）にもとづくものであります。〔正当な〕理由もなしにつくられた制度を未来

だからといって現代語の邦訳はまともかというところでもなさそうである。筆者が大学院生の折、知人が某ゼミの教官に塩野谷九十九訳ジョン・メイナート・ケインズ著『一般理論 (General Theory)』を読んで質問をしたいと申し出るや、「そんなもの読むな！」と一喝されたという。それではだれの訳ならいいのかと訊いたところ、「悪訳もまた翻訳だが、所詮、翻訳は翻訳、参考意見にすぎない。原書を読むに如かず」との返事が返ってきたとの由。うべなるかな！筆者がケインズの邦訳に目を通さなくなるとして数十年経つが、塩野谷後の邦訳がどこまで改良されたか寡聞にして知らない。

18世紀経済学の黎明期ともなれば、一つの単語の意味も現代語とはずいぶん異なる。何年か前にアダム・スミスの『国富論』を現代風に邦語訳したという御仁がいたが、これなんかは文語を現代語に機械的に置き換えることの危険性をまるで分っていない仕儀といってよい。例えば、本文で再三言及したように“capital”を「資本」と訳するのはなぜか？ いつ、どこで、だれが最初に使ったのか？ ほかの意味はないのか？ 同じように、“intérêt/interest”も、当時もいままも多義的で、文脈で使い分けなければならない。この御仁は「いま資本なんだから何が問題なんだ。利子もそうだろう」といいたいのだろう。お気軽・お手軽といえればそれまで…「眼光紙背に徹す」のアフォリズムをいま一度反芻するのも一考と思うのだがいかがなものか。

ちなみに、津田たちの名誉回復の一助となるかどうか心もとないけれども、ご同類がことのほか多い。例えば、筆者が「テュルゴーとデイヴィッド・ヒューム」と題した論稿を作成する過程でヒュームの『政治論集 (Political Discourses)』を読むかたわら、『道徳原理の研究 (An Enquiry concerning the Principles of Mor-

永劫不変にして不朽のものとするいわれはひとつとしてないであります」(Turgot [1775], p. 575)。ところが、出口勇藏は1942年に発表した論文「テュルゴの歴史観」のなかで、「人間の諸権利は、人間の歴史に基づくものではなくして、人間の自然に基づくものである」(出口 [1942], 94 ページ) との訳をつけ、テュルゴーの「歴史観」はケネーおよびフィジokrat派の金科玉条とする「自然的秩序」を基準としたものであると批判している。しかしながら、テュルゴーのいわゆる“nature des hommes”はこれをあえて英訳すれば“human nature”の謂いであり、出口のいう「人間の自然」は完全な誤訳であった。かれのテュルゴー批判は自作自演 (match pomp)、ありていにいえば独り相撲でしかない。

als)』(渡辺峻明訳)他に目を通したが、この本の訳者が“public utility”に「公共の効用性」なる邦語をふっているのを見て、正直、驚いた。ラテン語の“publicus”語源の“public”は、ヒュームの活躍した時代には「公共の」と訳すのは不適切である。

そもそも、「公」とは一体何か？ 中世、近現代と時代を経るにしたがってこのタームの語義が変わっており、「公共の」は19世紀ならばいざ知らず、ヒュームの時代であれば、「御公儀」や「公方様」のように一義的には権力と権力者(もしくは支配者)を指すほか、もともとの語義である「人びと」であって、堅物の研究者を気取ってこの語に訳を付ければ「大衆の有用性」とでもいおうか(老婆心ながら一言、ラテン語の“republica”——仏語“république”, 独語“Republik”, 伊語“repubblica”, 英語“republic”——とは、“res”と“publicus”との造語、その意味するところは「人びとに関する事物や事象」を語源とする)。

津田といい、永田といい、原田といい、はたまたヒュームの翻訳者の渡辺といい、谷崎潤一郎が蛇蝎磨羯の類よろしく忌み嫌った「学者先生」たちが18世紀の偉人たちの名著をかくまで虚仮こけにするに至った理由は一いつに日本語の見識不足にあるが、いうところの「古典学(études classiques)」もしくは「西洋古典(classics)」の素養に欠けることも看過できない。自慢するわけではないが、いまにして思えば *Le Grand Gaffiot* (羅仏大辞典)と首っ引きでテュルゴーの草稿を読む訓練をしてよかったと安堵している。

19世紀以前の、ラテン語が LINGVA FRANCA——古代フランク王国で使われた言語、転じて広汎に通用する言語——であった時代の学術研究には、英語ができる、フランス語ができる、あるいはドイツ語やイタリア語ができるだけではなく、ラテン語やギリシャ語の素養を不可欠とすると肝に銘じるべきであろう。わけても、世が世で事情が許せば聖職者の道を進み、すくなくとも大司教にはなれたであろうテュルゴーの著作を読むにはラテン語の素養が必要不可欠である。ありていにいえば、西洋古代史家、思想史家や美術史家と同じである。かれらは経済思想史家の大方と違ってラテン語および／もしくはギリシャ語を修めているはずである。

もう10年以上前になるだろうか、リチャード・カンティヨンの『商業論説』——ここでは津田内匠に敬意を表してリチャード・カンティロン著『商業一般本性試論』とっておこう——を読んだ自称中川ゼミ生がこんな感想を吐露した。曰く、「中川先生はカンティヨンを立派な経済学者とおっしゃいますが、『地主〔土地所有者〕が公債の利子を支払う』という人の書物は本当に読むに値するのでしょうか?。「あれは誤訳、それも致命的な誤訳です」と答えると、わがゼミ生は「私たちには、それが怪しく思えても誤訳かどうかを見分けることはできません。第一、不勉強です。どうしたらいいのでしょうか?」と返した。これに対して、「研究者は自分の研究対象によって外国語を使い分けなければなりません。学生はどうか? はじめはなんでも片っ端から本を読むことです。それが積もり重なってあなたの頭のなかが豊かになるはずですよ。違いが分かるようにもなります」といったのち自戒を込めてこう付け加えた。

すなわち、「翻訳で損をしている外国の作家、思想家、政治家はこの国ではゴマンといます。カンティヨンやテュルゴーしかり。ケインズ、マルクス、リカードウ、ヒュームらもそうかもしれません。細心の注意を払って読書すること。ぼくが学生の頃に習った思想史の先生がこんなことを話していました。『思想史を勉強する理由ですか? 世の中にはいろいろな考えがあるということを知るためです。あの人は偉いし有名だからその考えには間違いない——なんてIdolaつまり偏見や先入観に陥らないよう心掛けねばなりません。間違いがないという考えは、とどの詰まり、思考の放棄、人としての墮落の一里塚です。間違ったら、失敗したら糺す努力をすることです…』。文学でも、哲学・思想でも、社会科学でも、いろんなテキストを読むことを心掛けていますが、きっと若い頃からの癖でしょうね。あるいは失敗を教訓化した結果かもしれません。

わが国におけるテュルゴーの、ひいては経済思想史や経済学史の研究状況を顧みるに話の要点は以上に尽きる。もちろん言い足りないところも多々あるが、最後に一言。按ずるに、古典的名著と称される作品の過去の邦訳はこれができるだけ見直し、新訳を世に問うことが必要だろう。「化け物」のような悪文を何十年にわたって放置するのは、翻訳者ばかりか、出版社サイドにも責任がある

と確信するものだがいかがだろう。それが可能となれば、テュルゴーやカンティヨンらの名誉回復ばかりか、第二、第三のテュルゴーやカンティヨンが輩出する不幸を避けることができること請け合いである。だが、昨今の経済思想史や経済学史をめぐる研究環境を鑑みるに遅きに失した感があるやもしれない。

(2020年12月6日、等々力の拙宅にて脱稿)

参考文献

欧文

- Amable, Bruno et Stefano Palombarini [2005], *L'économie politique n'est pas une science morale*, Paris, Raisons d'agir Éditions.
- Baudrillard, Henri [1846], "Turgot", *Revue des Deux Mondes*, Période initiale, tome 14: réimpression FB Editions, printed in Great Britain by Amazon.
- Blaug, Mark [1991], "Introduction to *Richard Cantillon (1689-1734) and Jacques Turgot (1727-1781)*", in Mark Blaug (ed.), *Pioneers in Economics Series*, Vol. 9, Aldershot, Edward Elgar Publishing Co., 1991.
- Bouchot, Auguste [1846], "Éloge de Turgot, discours qui a obtenu la première mention dans la séance du 10 septembre 1846", Paris, Académie française, date la première édition 1846: gallica.bfn.fr/Bibliothèque nationale de France
- Brewer, Anthony [1986], *Richard Cantillon: Pioneer of Economic Theory*, Routledge, London/ New York.: reprint, 2002.
- Brewer, Anthony [1987], "Turgot: founder of classical economics", *Economica*, 54: reprinted in Mark Blaug (ed.), *Richard Cantillon (1680-1734) and Jacques Turgot (1727-1781)*, *Pioneers in Economics*, Vol. 9, Edward Elgar, Aldershot, 1991.
- Brewer, Anthony [2011], *The Making of Classical Economic Growth*, London / New York, Routledge.
- Brittan, Samuel [2007], "The mediocrity of circumstances", *Financial Times*, February 22.
- Cantillon, Richard [1755], *Essai sur la nature du commerce en général*: réimpression de l'édition de 1952 (sous la direction d'Alfred Sauvy avec le préface d'Antoin E. Murphy), fondée sur le texte original (*Essay sur la nature du commerce général*, à Londres, Chez Fletcher Gyles, dans Holborn) de 1755, avec études et commentaires revues et augmentées, Institut national d'études démographiques (I.N.E.D.), Paris, 1997.
- Daire, Eugène et Hipolyte Dussard [1844], "Notice historique sur la vie et les ouvrages de Turgot", *Œuvres de M. Turgot*, tome I, Nouvelle édition, classée par ordre de matières avec les notes de Dupont de Nemours, augmentée de lettres inédites, des questions sur le commerce, et d'observations et notes nouvelles, par MM. Eugène Daire et Hipolyte Dussard, Paris, Réimpression de l'édition 1884, Osnabrück, Otto Zeller, 1966.
- Dostaler, Gilles [2010a], "Turgot, théoricien du capitalisme, avocat du libéralisme", *Alternatives Économiques- Mensuel*, n° 290, avril.
- Dostaler, Gilles [2010b], "Vincent de Gournay, précurseur du libéralisme et protectionniste", *Alternatives Économiques- Mensuel*, n° 296, novembre.

- Eagly, Robert V. [1974], *Structure of Classical Economic Theory*, Oxford, Oxford University Press.
- Faccarello, Gilbert et Anne Cot [1992], “Turgot et l'économie politique sensualiste”, dans: Alain Béraud et Gilbert Faccarello (sous la direction de), *Nouvelle histoire de la pensée économique*, tome 1: des scolastiques aux classiques, Paris, Édition de la Découverte.
- Gallais-Hammono, Janine [1982], “Le premier exemple d'un concept économique en extension et en compréhension: le concept de capital travaillé par Turgot”, dans: Bordes, Christian et Jean Morange (sous la dir. de), *Turgot, économiste et administrateur: Acte d'un séminaire organisé par la Faculté de droit et de sciences économiques de Limoges pour le bicentenaire de la mort de Turgot, 8, 9 et 10 octobre 1981*, Limoges, Presses Universitaires de France: Publications de la Faculté de droit et de sciences économiques de l'Université de Limoges.
- Gourmay, Jacques Vincent de [2008 (1754)], *Remarques sur le commerce de Josiah Child; dans Traité sur le commerce de Josiah child; suivi des Remarques de Jacques Vincent de Gourmay: texte intégral d'après les manuscrits*, édition et préface de Simone Meyssonier, Paris, Éditions L'Harmattan.
- Groenewegen, Peter. D. [1971], “A Re-Interpretation of Turgot' Theory of Capital and Interest”, *Economic Journal*, 81: reprinted in Mark Blaug (ed), *Richard Cantillon (1689–1734) and Jacques Turgot (1727–1781)*, Pioneers in Economics, Vol 9, Aldershot, Edward Elgar, 1991.
- Hoyng, Anne-Claire [2012], “Résumé français”, présenté au Séminaire autour d'A.-C. Hoyng et Gallais-Hammono: “Adam Smith a-t-il plagié Turgot?”, Institut Turgot, Paris, le 23 mai: <http://blog.turgot.org/index.php?post/Hoyng-1>
- Hoyng, Anne-Claire [2015], *Turgot et Adam Smith: Une étrange proximité*, Paris, Honoré Champion: Champion Essais 44.
- Hutchison, Terence Wilmot [1982], “Turgot and Smith”, dans: Bordes, Christian et Jean Morange (sous la dir. de), *Turgot, économiste et administrateur: Acte d'un séminaire organisé par la Faculté de droit et des sciences économiques de Limoges pour le bicentenaire de la mort de Turgot, 8, 9 et 10 octobre 1981*, Limoges, Presses Universitaires de France: Publication de la Faculté de droit et de sciences économiques de l'Université de Limoges.
- Hutchison, Terence Wilmot [1988], *Before Adam Smith: The Emergence of Political Economy 1662–1776*, London/New York, Basil Blackwell.
- Jessua, Claude [1991], *Histoire de la théorie économique*, Paris, Presses Universitaires de France: < Économie > Collection dirigée par Claude Jessua, Christian Labrousse et Daniel Vitry.
- Jevons, William S. [1881], “Richard Cantillon and the nationality of political economy”, *Contemporary Review*, reprinted in Henry Higgs (ed.) [1931], *Richard Cantillon, Essai sur la nature du commerce en général*, London, Royal Economic Association (reprinted, Augustus Kelly, New York, 1964). 高野利治訳「カンティヨン論 (ジェヴォンズ)」, H. W. スピーゲル編, 越村信三郎・伊坂市助監訳『経済思想発展史』I (経済学の黎明), 東洋経済新報社, 1954年, 所収(ジェヴォンズ論文の邦訳は, このほかにも戸田正雄訳, カンティヨン著『経済概論』(春秋社, 1949年)の巻末に収録されたものがあるが, 本稿では訳文の正確性を期すため戸田訳ではなく高野訳に従った)。
- Lundberg, I. C. [1964], *Turgot's Unknown Translator: The Réflexions and Adam Smith*, The Hague, Martinus Nijhoff.
- Marx, Karl [1867], *Le Capital: Livre premier*, traduction par Joseph Roy, revue par Maximilien Rubel; dans *Karl Marx: Œuvres*, tome I - Économie, édition établie et annotée par Maximilien

- Rubel, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1968.
- Marx, Karl [1877], “En marge de l’histoire critique de l’économie politique d’Eugen Düring”: traduction française par Rubel et Évrard: “Randnoten zu Dürings Kritische Geschichte der Nationalökonomie”, dans *Karl Marx: Œuvres-Économie*, tome I, édition établie et annotée par Maximilien Rubel, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1968.
- Meyssonnier, Simone [2008], “Présentation”, dans: *Traité sur le commerce de Josiah Child: suivi des Remarques de Vincent de Gournay*, Edition et préface de Simone Meyssonnier, Paris, Editions L’Harmattan.
- Murphy, Antoin E. [1986], “Le développement des idées économiques en France, 1750–56”, *Revue d’histoire moderne et contemporaine*, tome XXXII, octobre-décembre.
- Rashid, Salim [1986], “Smith, Steuart, and mercantilism: Comment”, *Southern Economic Journal*, 52 (3), January: reprinted in Mark Blaug (ed), *Adam Smith (1723–1790)*, Vol. 1, *Pioneers in Economics*, Vol 12, Edward Elgar, Aldershot, 1991.
- Ravix, Joël-Thomas and Paul-Marie Romani [1997], “Le < système économique > de Turgot”, dans: *Turgot: Formation et distribution des richesses*, textes choisis et présentés par Ravix et Romani, Paris, GF Flammarion.
- Ricard, David [1817], *The Principles of Political Economy and Taxation*, edited by Piero Sraffa with the collaboration with Maurice Herbert Dodd, *Works and Correspondence of David Ricard*, Vol. I, Cambridge, Cambridge University Press, 1954; reproduced in paperback by The Liberty Fund, Indianapolis, Indiana, 2004. 堀経夫訳『経済学及び課税の原理』, 日本語版「リカードウ全集」刊行委員会編『デイヴィッド・リカードウ全集』第1巻, 雄松堂書店, 1972年
- Rothbard, Murray [1986], “L’éclat de Turgot” (<http://archive.is/am.du.7rddr>), originally published as “The brilliance of Turgot” in Rothbard Murray, *Economic Thought before Adam Smith: An Austrian Perspective on the History of Economic Thought*, Volume I, Ch. 14, Aldershot, Edward Elgar Publishing Co., 1995.
- Sauvage-Jourdin, François [1903], *Issac de Bacalan et les idées libre-échangistes en France: vers le milieu du dix-huitième siècle*, Paris, Librairie de Société du recueil général de loides arrêts; reprint, Kessinger Publishing, June 2010.
- Schumpeter, Joseph A. [1954], *History of Economic Analysis*, London, George Allen & Unwin; reprint, London, Routledge, 1994.
- Sen, Amartia [1987], *On Ethics and Economics*, Oxford, Backwell. 徳永澄憲・松本保美・青山治城訳『経済学の再生——道徳哲学への回帰』, 麗澤大学出版会, 2002年。
- Smith, Adam [1790 (1979)], *The Theory of Moral Sentiments* (Sixth Edition), edited by D. D. Raphael and A. L. Macfie, Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith, Oxford, Oxford University Press, 1976: reproduced in paperback by The Liberty Fund, Indianapolis: Indiana, 1979. 米林富男訳『道徳情操論』上・下, 未来社, 1969年。
- Smith, Adam [1776], *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited by Edwin Cannan, M. A., New York, Random House, 1937; reprinted 1965. 大河内一男訳『国富論』, 中央公論社版『世界の名著』31, 1968年。
- Turgot, Anne Robert Jacques [1766a], “Lettre à Pierre-Samuel Dupont du 20 février Limoges”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome II, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1766b], “Lettre à David Hume du 23 juillet, Limoges”, éd. Gus-

- tave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome II, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1766c], *Réflexions sur la formation et la distribution des richesses*, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome II, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1769], “Valeurs et monnaies (Projet d’article)”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome III, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1770a], “Mémoire sur les prêts de l’argent”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome III, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1770b], “Lettre à Pierre-Samuel Dupont du 30 janvier, Limoges”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome V, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1770c], “Lettre à Pierre-Samuel Dupont du 23 mars, Limoges”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome V, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1770d], “Lettre à Pierre-Samuel Dupont du 29 mars, Limoges”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome V, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1771], “Lettre à Pierre-Samuel Dupont du 15 février, Limoges”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome V, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1775], “Mémoire sur les municipalités”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome IV, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913–1923.

邦文

- 池田浩太郎 [2001], 「マックス・ウェーバーとヴェルナー・ゾンバルト——ゾンバルトとその周辺の人々——」, 『成城大学経済研究』(成城大学経済学会), 第151, 152号, 所収。
- 出口勇藏 [1942], 「テュルゴの歴史観」, 京都帝國大學經濟學會『經濟論叢』第54巻第5號, 所収。
- 小原啓士 [1948], 『近代資本主義の範疇——ゾンバルト「資本主義理論」』青木書店。
- 久保田明光 [1955], 『ケネー研究』時潮社。
- 佐藤公俊 [2020], 「書評『テュルゴとアダム・スミス』中川辰洋著 [日本経済評論社, 2019年]」, 経済理論学会編『季刊 経済理論』第57巻第3号 (桜井書店), 10月。
- 島田英一 [1927], 『重農派經濟學の研究』富文堂。
- 玉野井芳雄 [1956], 「経済学説の発展」, 宇野弘藏編『経済学』上巻, 角川書店, 所収。
- 津田内匠 (訳) [1962], 『富の形成と分配に関する考察』, 『テュルゴ経済論集』岩波書店, 所収。
- 津田内匠 (訳) [1992], リチャード・カンティロン著『商業一般試論』名古屋大学出版会。
- 手塚壽郎 [1927], 「グルネーの經濟思想 (其一～六)」神戸高等商業學校『國民經濟雜誌』第44巻第1, 2, 3, 4巻, 第45巻第1, 2號, 所収。

- 手塚壽郎 [1933], 「心理的経済価値説の歴史的研究の一節——チュルゴーの Valeurs et monnaies の想源に就いて」, 福田徳三博士追憶論文集 (神戸高等商業学校『國民經濟雜誌』第 55 卷第 2 號), 所収。
- 中川辰洋 [2006/2007], 「リシヤール・カンティヨンと価格メカニズム——『経済学の揺籃』の意味するもの——」, 青山学院大学経済学会編『青山經濟論集』第 58 卷第 2, 3 号, 2006 年 12 月, 2007 年 3 月, 所収。
- 中川辰洋 [2011], 『ジョン・ローの虚像と実像——18 世紀經濟思想の再検討 (青山学院大学經濟研究所研究叢書 8)』日本經濟評論社。
- 中川辰洋 [2013], 『テュルゴー資本理論研究』日本經濟評論社 (平成 25 年度独立行政法人日本學術振興会科学研究費事業 (科学研究費助成金) (研究成果公開助成金「學術図書」課題番号 255151)。
- 中川辰洋 [2016], 『カンティヨン經濟理論研究』日本經濟評論社 (平成 28 年度独立行政法人日本學術振興会科学研究費事業 (科学研究費助成金) (研究成果公開助成金「學術図書」課題番号 16HP5144)。
- 中川辰洋 [2017], 「経済学における普遍性と土着性, 国際性と国民性——佐伯尚美先生の宿題に答える——」, 武蔵大学経済学部櫻井ゼミ同窓会誌『対話』第 5 号, 所収。
- 中川辰洋 [2018], 「書評 Hoyng, Anne-Claire, *Turgot et Adam Smith: Une étrange proximité.* (Champion Essais 44) 216 p. 2015 (Champion, FR)」, 経済学史学会『経済学史研究』第 59 卷第 2 号, 1 月, 所収。
- 中川辰洋 [2019a], 『テュルゴーとアダム・スミス』日本經濟評論社。
- 中川辰洋 [2019b], 「テュルゴー經濟理論初期研究の再検討——A. プショー『テュルゴー追悼演説』を手掛かりに——」, 青山学院大学経済学会編『青山經濟論集』第 71 卷第 3 号, 9 月, 所収。
- 中川辰洋 [2020], 「テュルゴーとデイヴィッド・ヒューム」(上・下), 青山学院大学経済学会編『青山經濟論集』第 72 卷第 1, 2 号, 6, 9 月, 所収。
- 永田清 (訳) [1934], チュルゴオ著『富に関する省察』岩波文庫。
- 馬場宏二 [2008], 『経済学古典探索——批判と好奇心——』御茶の水書房。
- 原田光三郎 (訳) [1924], チュルゴー著『富の形成と分配』引文堂。
- 藤塚知義 [1990], 『アダム・スミスの資本理論——古典経済学の成立と経済学クラブの展開』日本經濟評論社。
- 山川義雄 [1948], 「十八世紀佛蘭西主觀價值論の形成——ガリアニ・チュルゴー・コンジャック——」, 早稲田大学政治経済学会『早稲田政治經濟學雜誌』第 96 號, 所収 (のちに, 山川 [1968] 後編第 1 章として再録)。
- 山川義雄 [1960], 「チュルゴーの価値論の変遷について」, 早稲田大学政治経済学会『早稲田政治經濟學雜誌』第 163 号, 所収 (のちに山川 [1968] 後編第 4 章として再録)。
- 山川義雄 [1968], 『近世フランス経済学の形成』世界書院。
- 山口正太郎 [1929], 『重農派經濟學の人々』ロゴス書院。
- 山口正太郎 [1930], 「チュルゴーの『富の形成と分配』」, 京都帝國大學經濟學會『經濟論叢第 30 卷』第 2 號, 所収。

Appendix: TATSVHIRO NAKAGAWA – Curriculum vitae brevis et opera academicae

Curriculum vitae brevis

略歴

- ◆1952年8月18日札幌市に生まれる。最終学歴 東京大学大学院経済学研究科応用経済専攻博士課程修了(1989年3月15日), 経済学博士(東京大学) 博経第48号
- ◆職歴 社団法人 公社債引受協会業務部調査課非常勤嘱託(1983年10月~1985年3月), 同調査部調査課勤務(1985年4月~1987年9月), 同課長代理(1987年10月~1990年3月), 同調査役(1990年4月~1992年3月), 同課長(1992年4月~1993年10月), 青山学院大学経済学部経済学科助教(1994年4月~1997年3月), 同教授(1997年4月~2008年3月)を経て, 同現代経済デザイン学科教授(2008年4月~2021年3月), 公益財団法人 日本証券経済研究所客員研究員(2005年~2008年7月, 2009年9月~2020年6月)。ほかに, 中央商科短期大学(1987年4月~1994年3月), 武蔵大学(2001年9月~2002年3月, 2004年4月~9月, 2005年4月~2007年3月), 釧路公立大学(1994年7月, 1995年7月)で非常勤講師, UBS(スイス・ユニオン銀行)東京支店社内研修講師(1992年6月), 経済産業省経済産業研修所講師(2001年6月, 9月)
- ◆存外調査・研究 ヨーロッパ議会・ヨーロッパ委員会後援研修制度 EUVP(ヨーロッパ連合訪問プログラム)参加(1995年3月), 在外研究期間を利用して, ソシエテ・ジェネラル銀行パリ=ラデファンス(Société Générale, Paris-La Défense)資本市場部経済調査チーム(現・ストラテジスト調査チーム)所属(1999年9月~2000年8月), パリ第10大学(ナンテール校)客員研究員(2008年9月~2009年7月)
- ◆所属学会 証券経済学会(1984年7月~), 経済学史学会(2010年10月~2019年3月)。ほかに, フランソワ・ミッテラン研究所(Institut François Mitterrand: IFM, 本部パリ)友の会(2006年7月~)

Opera academiae

研究業績

1. 著書(単著)

『テュルゴーとアダム・スミス』(日本経済評論社, 2019年)

『カンティヨン経済理論研究』(日本経済評論社, 2016年)(平成28年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費事業(科学研究費助成金)(研究成果公開助成金「学術図書」課題番号16HP5144)

『テュルゴー資本理論研究』(日本経済評論社, 2013年)(平成25年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費事業(科学研究費助成金)(研究成果公開助成金「学術図書」課

題番号 255151)

『ジョン・ローの虚像と実像——18世紀経済思想の再検討(青山学院大学経済学研究所研究叢書8)』(日本経済評論社, 2011年)(青山学院大学経済学研究所研究叢書刊行助成金により出版)

『1999年ユーロ圏誕生——EU経済通貨統合の進展——』(東洋経済新報社, 1998年)

『ゼミナール EC 通貨・金融市場統合と資本市場』(東洋経済新報社, 1993年)

『フランス国債市場の変貌と金融革新』(財団法人 資本市場研究会, 1989年)(財団法人 資本市場研究会出版助成金により出版)(東京大学提出学位請求論文)

2. 著書(共著・分担)

第3章「フランス銀行の独立性の強化——中央銀行法改正の意義と背景」, 小林襄治編『金融史の国際比較』(青山学院大学総合研究所・経済研究センター叢書第6号, 1997年3月)

第4章「通貨政策」, 大西健夫・岸上慎太郎編『EU政策と理念』(早稲田大学出版会, 1995年)

第7章「フランス——1980年代フランスの金融改革と金融政策——」(第9回法政大学経営学部大内兵衛記念公開講座「現代世界の金融政策——その動向と国際比較——」(於・法政大学市ヶ谷キャンパス, 1992年12月)提出論文), 西村閑也・林直嗣編『現代世界の金融政策』(日本経済評論社, 1993年)

第4部III「レギュラシオン学派の理論と系譜——F・ベルウとの関連を中心に——」, 今東博文・折原裕・佐藤公俊編『現代ポリティカル・エコノミーの問題構制』(櫻井毅先生還暦記念論文集)(社会評論社, 1991年)

第1部第2論文「欧州における金融改革の現状と展望——フランスの〈総合化〉を中心に」, 吉野昌甫監修・津田和夫他編『金融のリストラクチャリング——収益不安の原点を探る——』(経済法令研究会, 1990年)

第4章「公社債市場」, 津村英文編『証券市場論入門』(有斐閣, 1990年)

第1章「現代公社債市場の概観」, 第2章「金融市場における公社債市場」*, 社団法人 公社債引受協会調査部編『現代公社債市場の基礎知識』社団法人 公社債引受協会, 1989年)

「22. 円建外債市場」, 「23. 東京外貨建外債市場」, 舘龍一郎監修『国際金融市場 TOKYO』(有斐閣, 1989年)

第2章「公社債の発行市場」(田中英一と共著), 志村嘉一編『現代日本の公社債市場』(東京大学出版会, 1986年)

第3部第2章「農林中央金庫の国際化とその問題点」(加藤和暢と共著), 大内力代表編

集・佐伯尚美編集担当『金融自由化と農業金融』（日本農業年報 第33集）（御茶の水書房, 1985年）

第2章「組合金融における余裕金運用の変化と問題点」, 佐伯尚美編著『組合金融の構造と変貌』（農林統計協会, 1982年）

3. 翻訳

B. ポーキングホーン, D.L. トムソン『女性経済学者群像——アダム・スミスを継ぐ卓越した八人——』（櫻井毅監修, 佐藤公俊他訳, 御茶の水書房, 2008年）第7章「イルマ・エーデルマン（1930-）」（船木恵子と共訳）, 第8章「バーバラ・バーグマン（1927-）」

OECD（経済協力開発機構）編『経済政策の転換——先進11カ国のケース・スタディー——』（中川辰洋監訳, 日本経済評論社, 1995年）「序文」, 第1章「序論, 要旨および結論」, 第5章「フランス」, 第6章「イギリス」, 第7章「イタリア」, 第12章「ベルギー」, 「あとがき」

リア・V・カーティン／ジェローム・S・フォンス「企業信用力の測定」（社団法人 証券アナリスト協会編『証券アナリストジャーナル』第33巻第6号, 1994年6月）

4. 学術論文

「テュルゴー理論の経済思想史上の位置と評価——佐藤公俊氏の批評に答える——」（青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第72巻第4号, 2021年3月）

「佐藤公俊氏の拙著『テュルゴーとアダム・スミス』の書評へのリプライ」（経済理論学会編『季刊 経済理論』（桜井書店刊）第57巻第4号, 2021年1月）

「忘れられた女性変革者たち——フランス経済誌が選んだ20人——」（青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第72巻第3号, 2020年12月）

「テュルゴーとデイヴィッド・ヒューム——書簡上の『経済論争』の真相を読み解く——（下）」（青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第72巻第2号, 2020年9月）

「テュルゴーとデイヴィッド・ヒューム——書簡上の『経済論争』の真相を読み解く——（上）」（青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第72巻第1号, 2020年6月）

「テュルゴー経済理論初期研究の再検討——A. プショー『テュルゴー追悼演説』を手掛かりに——」（青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第71巻第2号, 2019年9月）

「転機に立つドイツ銀行セクター——ドイチュ＝コムツツ合併協議に寄せて——」（公益財団法人 日本証券経済研究編『証券レビュー』2019年5月号）

「Pasokisierung/Pasokisation/Pasokification 考——ヨーロッパ政治状況の変化とEU統合へのインプリケーション」（青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第70巻第1号, 2018

年6月)

- 「『資本』概念生成・成立再論——E. キャンンのアダム・スミス『資本』理論の批判的考察——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第69巻第3号, 2017年12月)
- 「イタリア式銀行破綻処理の分析——ヴェネト州の2行の事例を中心に——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第69巻第2号, 2017年9月)
- 「『エンケル白書』にみるヨーロッパの将来——統合速度多様化の容認とそのインプリケーション」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第69巻第1号, 2017年6月)
- 「ヨーロッパ統合の展望と課題——BREXITはEU再生のチャンス——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第68巻第3号, 2016年12月)
- 「テュルゴーとアダム・スミス——Aut proximas, aut differentia——(II・完)」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第68巻第2号, 2016年9月)
- 「テュルゴーとアダム・スミス——Aut proximas, aut differentia——(I)」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第68巻第1号, 2016年6月)
- 「EMU完成のロードマップと行動計画——“5代表者レポート”のインプリケーション」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第67巻第3号, 2015年12月)
- 「カンティオン経済理論研究(IV・完)」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第67巻第2号, 2015年9月)
- 「カンティオン, ケネー, テュルゴー——18世紀フランス価値学説形成の歴史的考察(II)」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第67巻第2号, 2015年9月)
- 「ヨーロッパ銀行同盟の現状と展望——銀行セクターの変革に向けて——」(公益財団法人日本証券経済研究所編『証券レビュー』2015年7月号。同所主催「証券セミナー」(2015年6月12日実施)講演録)
- 「カンティオン, ケネー, テュルゴー——18世紀フランス価値学説形成の歴史的考察(I)」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第67巻第1号, 2015年6月)
- 「カンティオン経済理論研究(III)」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第67巻第1号, 2015年6月)
- 「ギリシャ新政権の100日——ユーロ圏債務処理のエンドゲーム——」(公益財団法人日本証券経済研究所編『証券経済研究』第90号, 2015年6月)
- 「カンティオン経済理論研究(II)」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第66巻第4号, 2015年3月)
- 「カンティオン経済理論研究(I)」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第66巻第3号, 2014年12月)
- 「ヨーロッパ銀行同盟元年——現状と課題——」(財団法人日本証券経済研究所編『証券経済研究』第88号, 2014年12月)

- 「変容するEUの課題と展望——ヨーロッパ議会選挙後のプロセスを中心にして——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第67巻第2号, 2014年9月)
- 「ユーロ圏銀行同盟の課題と展望——2014年3月のSRM政治交渉の帰結とインプリケーション——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第67巻第1号, 2014年6月)
- 「ユーロ圏銀行同盟の理念と現実——一歩前進, 二歩後退——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第65巻第4号, 2014年3月)
- 「Cherchez l'homme (事件の陰に男あり)——いわゆるリーマン・ショック5周年によせて——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第65巻第3号, 2013年12月)
- 「経営危機脱出なるかフランス系金融機関——クレディ・アグリコール・グループを中心にして——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第65巻第3号, 2013年12月)
- 「ユーロ圏銀行同盟再考——2013年6月のEU首脳会議のインプリケーション——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第65巻第2号, 2013年9月)
- 「動き出したユーロ圏プロジェクトファイナンス——“ベイベー・ユーロボンド”成長の条件」(証券経済学会 第77回全国大会(於・関東学院大学)報告論文)(証券経済学会『証券経済学会年報』第48巻, 2013年7月)
- 「フランス銀行法改正の意義と問題点——銀行規制・監督体制は強化されたか——」(財団法人 日本証券経済研究所編『証券経済研究』第82号, 2013年6月)
- 「キプロス金融救済の混迷——ユーロ圏銀行同盟への教訓——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第65巻第1号, 2013年6月)
- 「『資本』概念成立探求——馬場宏二『資本・資本家・資本主義』を中心にして——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第64巻第4号, 2013年3月)
- 「ユーロ圏銀行同盟考——全面同盟か, それとも部分同盟か?——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第64巻第3号, 2012年12月)
- 「ユーロ圏債務危機の転換点——2012年6月のEU首脳会議をふり返って——」(財団法人 日本証券経済研究所編『証券レビュー』2012年10月号。同所主催「証券セミナー」(2012年9月実施)講演録)
- 「今次EU首脳会議の合意とその含意——いわゆる『銀行同盟』構想を中心にして」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第64巻第2号, 2012年9月)
- 「ユーロボンド創出構想の理念と現実——ヨーロッパ委員会レポートを中心にして——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第64巻第1号, 2012年6月)
- 「クレディ・アグリコールの構造と変容——株式上場10年の回顧と展望——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第64巻第1号, 2012年6月)
- 「フランス協同組合金融機関の曲り角——『原点回帰』を目指すクレディ・アグリコールを中心にして——」(青山学院大学経済研究所編『経済研究』第4号, 2012年3月)

テュルゴー理論の経済思想史上の位置と評価

- 「テュルゴー資本理論研究——経済学の古典形成における意義と限界——(IV・完)」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第63巻第4号, 2012年3月)
- 「テュルゴー利子論への補遺——『貨幣貸付に関する覚書』を中心にして——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第63巻第4号, 2012年3月)
- 「テュルゴー資本理論研究——経済学の古典形成における意義と限界——(III)」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第63巻第3号, 2011年12月)
- 「ユーロ圏債務危機の佳境——いわゆる“ユーロボンド”発行に向けて——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第63巻第2号, 2011年9月)
- 「テュルゴー資本理論研究——経済学の古典形成における意義と限界——(II)」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第63巻第2号, 2011年9月)
- 「トリシェ後のECB——“スーパーマリオ”擁立の意味するもの——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第62巻第1号, 2011年6月)
- 「テュルゴー資本理論研究——経済学の古典形成における意義と限界——(I)」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第63巻第1号, 2011年6月)
- 「ユーロ圏債務危機の新展開——2010年12月のEU首脳会議決定とその含意——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第62巻第4号, 2011年3月)
- 「ギリシャ危機と財政再建計画の深層——連邦的ルールを志向するユーロ圏——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第62巻第3号, 2010年12月)
- 「SWF(政府投資ファンド)の国家持ち株会社化——現状と展望——」(財団法人日本証券経済研究所編『証券レビュー』2010年12月号。同所主催「証券セミナー」(2010年11月8日実施)講演録)
- 「チャイルド——グルネー——テュルゴー——『資本』概念の形成と成立に関する一考察——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第62巻第2号, 2010年9月)
- 「ジョン・ローとリシャール・カンティヨン——貨幣・銀行論のインプリケーション(II)」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第62巻第2号, 2010年9月)
- 「ジョン・ローとリシャール・カンティヨン——貨幣・銀行論のインプリケーション(I)」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第62巻第1号, 2010年6月)
- 「SWF(政府系投資ファンド)再論——国家持ち株会社化の模索とその可能性をめぐって」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第62巻第1号, 2010年6月)
- 「ジョン・ローの虚像と実像——経済学説史上の再評価をめぐって——(III)」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第61巻第4号, 2010年3月)
- 「ジョン・ローの『マクロ経済分析』の意義と限界——ロバート・V・イーグリーの所説を中心にして——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第61巻第4号, 2010年3月)

- 「ジョン・ロー貨幣論研究——ワッサーマン／ビーチ論文(1934年)を中心にして——」
(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第61巻第3号, 2009年12月)
- 「ジョン・ローの虚像と実像——経済学説史上の再評価をめぐって——(II)」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第61巻第3号, 2009年12月)
- 「サルコジ・ボンド構想——その有効性と現実性——」(財団法人 日本証券経済研究所編『証券レビュー』2009年11月号)
- 「ジョン・ローの虚像と実像——経済学説史上の再評価をめぐって——(I)」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第61巻第2号, 2009年9月)
- 「スイス金融市場とタックスヘイブン問題」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第61巻第1号, 2009年6月)
- 「スイス金融市場は生き残れるか 税金回避地の深層」(東洋経済新報社『金融ビジネス』春季号(通巻No.258), 2009年5月)
- 「MAI 68 余話——68年5月事件発祥の地ナンテール・キャンパスを歩く——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第60巻第4号, 2009年3月)
- 「欧州銀行界の優等生, 過信が招く『BNP パリバ』の迷走!」(東洋経済新報社『金融ビジネス』秋季号(通巻No.257), 2009年2月)
- 「MAI 68 再訪——1968年5月事件40周年にさいして——(II)」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第60巻第3号, 2008年12月)
- 「転機に立つフランス協同組合銀行セクター——庶民銀行・貯蓄銀行合併のインプリケーション——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第59巻第3号, 2008年12月)
- 「ついに公的資金を投入 スイスの巨人UBSの正念場」(東洋経済新報社『金融ビジネス』秋季号(通巻No.256), 2008年11月)
- 「MAI 68 再訪——1968年5月事件40周年にさいして——(I)」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第60巻第2号, 2008年9月)
- 「『ソジェン・スキャンダル』ノート——P-A. ドゥロメ著『消えた50億ユーロ』を中心にして——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第60巻第1号, 2008年6月)
- 「ソシエテ ジェネラル銀行スキャンダルの深層」(東洋経済新報社『金融ビジネス』春季号(通巻No.254), 2008年5月)
- 「SWFは銀行“救世主”か?——いわゆる『サブプライム問題』対策の側面——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第60号第1号, 2008年3月)
- 「社会的経済論ノート——フランス型『社会的企業』を中心にして——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第59巻第4号, 2007年3月)
- 「イタリア銀行セクターの構造と変容——統一銀行市場への道のりと今後の展望——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第59巻第1号, 2007年6月)

- 「リシャール・カンティヨンと価格メカニズム——『経済学の揺籃』の意味するもの——
(II)」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第58巻第4号, 2007年3月)
- 「フランスにおける個人向け国債流通市場の1年」(財団法人 日本証券経済研究所編『証券レビュー』2007年2月号)
- 「リシャール・カンティヨンと価格メカニズム——『経済学の揺籃』の意味するもの——
(I)」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第58巻第3号, 2006年12月)
- 「イタリア銀行 M&A スキャンダル——2005年3月~2006年2月——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第58巻第1号, 2006年6月)
- 「フランス貯蓄銀行グループの構造と変容——金融グロバリット化する協同組合銀行——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第57巻第4号, 2006年3月)
- 「イタリア銀行セクターの再編成と変容——5大銀行グループへの集中進む銀行市場 (II)」
(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第56巻第4号, 2006年3月)
- 「海外セミナー フランス銀行セクターの再編成と公的資金の変容」(住宅金融公庫広報部編『住宅金融月報』第647号, 2005年12月)
- 「イタリア銀行セクターの再編成と変容——5大銀行グループへの集中進む銀行市場 (I)」
(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第56巻第3号, 2004年12月)
- 「出直せ! 郵貯改革 鍵はフランスにあり」(東洋経済新報社『週刊東洋経済』2005年7月23日号)
- 「ユーロ圏誕生後のフランス銀行セクターの変容——新たな銀行グループ形成とその展望——」(財団法人 日本証券経済研究所編『証券経済研究』第53号, 2005年6月)
- 「ヨーロッパ銀行セクターの再編成」(II) (青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第55巻第4号, 2004年3月)
- 「ヨーロッパ銀行セクターの再編成」(I) (青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第55巻第3号, 2003年12月)
- 「現代フランス学生の就職事情——インターンシップを中心にして——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第55巻第1号, 2003年6月)
- 「EU 経済通貨統合とフランス政府証券市場——“Europlace-Paris” 戦略の展開とその問題点——」(財団法人 日本証券経済研究所編『証券経済研究』第42号, 2003年6月)
- “European monetary intergration 1969–2002: the long and winding road that leads to the euro” (青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第54巻第2号, 2002年9月。青山学院大学経済学部主催ノーベル経済賞授賞者ジョセフ・スティーグリッツ氏特別講演「国際シンポジウム〈グローバル時代の日本経済の復活 (Rebirth of Japan’s Economy in the Age of Globalization)〉」(2002年4月) 提出論文)
- 「インフレ目標は ECB の政策責任を強化するか——P・ボフィングの所説を中心にして

- 」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第53巻第1号, 2001年9月)
- 「ギリシャのユーロ圏加入の展望——『収束プログラム』の展開と成果——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第52巻第1号, 2000年6月)
- 「M&Aにより大型合併相次ぐヨーロッパ」(金融財政事情社『金融財政事情』2000年5月1-8日合併号)
- 「ユーロシステムの1年——金融政策の成果と課題——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第51巻第4号, 2000年3月)
- 「変貌するプライベートバンキング——カギを握るコーポレートフィナンサー——」(金融ジャーナル社『金融ジャーナル』1999年8月号)
- 「1999年ユーロランド誕生——喝采と懐疑の1カ月を評価する——」(中央経済社『税務広報』1999年4月号)
- 「政治と中央銀行——政治学からみた中央銀行独立化考——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第50巻第4号, 1999年3月)
- 「19世紀ドイツの通貨統一とEMU——H. ジェームズの所説を中心に——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第50巻第3号, 1998年12月)
- 「ヨーロッパ単一通貨圏の誕生——ブリュッセル首脳会議のインプリケーション——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第50巻第2号, 1998年10月)
- 「ユーロ圏誕生の意義と展望——国際的側面を中心にして——」(財団法人 国民経済研究協会編『景気観測』1998年9月号)
- 「ブレア労働党政権とポンド問題——イギリスのEMU政策の回顧と展望——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第50巻第1号, 1998年6月)
- 「地球規模“超”合併の疾風怒濤」(東洋経済新報社『週刊東洋経済臨時増刊〈平成不況〉』1998年3月)
- 「フランス新政権の100日——ヨーロッパに向かう『左翼現実路線』——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第49巻第3号, 1997年12月)
- 「動き出した日本版ビッグバン——外資系機関との業務提携は有効な戦略か——」(中央経済社『税務広報』1998年10月号)
- 「『アムステルダム』後のEMUの課題——最終局面を迎えたヨーロッパ通貨統合——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第49巻第2号, 1997年9月)
- 「フランス地方債発行の変貌——1990年代の動向を中心にして——」(財団法人 地方債協会編『地方債月報』1997年9月号)
- 「EMUと南ヨーロッパ諸国——イタリアのERM復帰を中心にして——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第49巻第1号, 1997年6月)
- 「やっつごらんビッグバン——シティの教訓——」(東洋経済新報社『週刊東洋経済臨時

- 増刊〈ビッグバンと金融大淘汰〉』1998年5月)
- 「共通通貨導入と企業の対応——AMUE レポートを中心に——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第48巻第4号, 1997年3月)
- 「EMU 過渡期のフランス国債市場——共通通貨ユーロ導入をめぐるフランスの対応——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第48巻第3号, 1996年12月)
- 「EMUと中央銀行の独立性——中央銀行の政策選好のコンバージョン——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第48巻第2号, 1996年9月)
- 「共通通貨創出と欧州の世論——マース・グループのヒアリングを中心に——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第48巻第1号, 1996年6月)
- 「本邦外債発行の展開と変貌——1980年代以降の発行状況を中心に——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第47巻第4号, 1996年3月)
- 「ヨーロッパ共通通貨創出のシナリオ——欧州委員会レポートを中心に——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第47巻第3号, 1995年12月)
- 「EMUとイギリスの挑戦——『シティー・リサーチ・プロジェクト』最終報告を中心に——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第47巻第2号, 1995年10月)
- 「『強いフラン政策』の展開——ヨーロッパ通貨統合からみた独仏関係——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第47巻第1号, 1995年6月)
- 「転機に立つスイス金融市場——揺れ動く『金融立国』の諸条件——」(財団法人 日本証券経済研究所大阪研究所編『証券経済』第191号, 1995年3月)
- 「イタリア金融市場の構造と変容——1980年代の金融改革の展開と挫折——」(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第46巻第1・2・3合併号, 1994年12月)
- 「フランス地方財政の現状——地方分権化法施行後の展開を中心に——」(財団法人 地方債協会編『地方債月報』1994年8月号)
- 「欧州資本市場と資本市場」(金融ジャーナル社『金融ジャーナル』1993年1月号)
- 「スイス金融帝国『大欧州』に沈む——偉大な〈隙間金融〉の転換点」(東洋経済新報社『金融ビジネス』1993年3月)
- 「ECU 債市場——“ヨーロッパ・キャピタル・マーケット”への移行の展望と課題——」(財団法人 日本証券経済研究所大阪研究所編『証券経済』第183号, 1993年3月)
- 「フランスの金融構造と金融革新——金融の証券化, 国際化, 総合化をめぐる——」(慶應義塾経済学会編『三田学会雑誌』1993年1月)
- 「急展開 ドイツ金融事情の変容・遅れてきた青年ブンデスバンクの挑戦」(東洋経済新報社『金融ビジネス』1992年12月号)
- 「ドイツ債券市場の展開——国家統合により加速する市場改革——」(社団法人 公社債引受協会編『公社債月報』1992年2月号)

- 「欧州資本市場の変貌と新展開 (9) — エピローグ: たゆたうといえども沈むことなし」
(金融ジャーナル社『金融ジャーナル』1990年12月号)
- 「欧州資本市場の変貌と新展開 (8) — ECU 債市場: 『ひとつの市場』, 『ひとつの通貨』」
(金融ジャーナル社『金融ジャーナル』1990年11月号)
- 「欧州資本市場の変貌と新展開 (7) — イタリア・スペインの資本市場: 南ヨーロッパの
光と影」(金融ジャーナル社『金融ジャーナル』1990年10月号)
- 「欧州資本市場の変貌と新展開 (6) — ベネルスク3カ国の資本市場: ヨーロッパの『資
金集散地』」(金融ジャーナル社『金融ジャーナル』1990年9月号)
- 「欧州資本市場の変貌と新展開 (5) — フランス資本市場: 証券化の『離陸』」(金融ジャー
ナル社『金融ジャーナル』1990年8月号)
- 「欧州資本市場の変貌と新展開 (4) — ドイツ資本市場: 行方を探る“フィナンツプラッ
ツ”」(金融ジャーナル社『金融ジャーナル』1990年7月号)
- 「欧州資本市場の変貌と新展開 (3) — 英国資本市場: 揺れ動く“キャピタル・シティ”」
(金融ジャーナル社『金融ジャーナル』1990年6月号)
- 「欧州資本市場の変貌と新展開 (2) — 新しいパラダムの創造と多様性」(金融ジャーナル
社『金融ジャーナル』1990年5月号)
- 「欧州資本市場の変貌と新展開 (1) — プロローグ」(金融ジャーナル社『金融ジャーナ
ル』1990年4月号)
- 「フランス金融革新の理論と実証 — ボワシュエの所説を中心に —」(財団法人 日本証
券経済研究所大阪研究所編『証券経済』第169号, 1989年9月)
- 「EC 市場統合と金融・資本市場の新展開 — 英・独・仏の動きを中心に —」(金融
ジャーナル社『金融ジャーナル』1989年1月号)
- 「フランス証券市場改革の現状」(証券経済学会 第39回全国大会(於・日本大学経済学
部三崎町校舎)報告論文)(証券経済学会『証券経済学会年報』第39巻, 1988年6月)
- 「フランス国債市場の構造と新展開 — 1980年代を中心にして —」(東京大学提出学位
請求論文, 1988年3月)
- 「フランス国債市場の構造と新展開 — 1980年代を中心にして —」(下)* (社団法人 公
社債引受協会編『公社債月報』1987年12月号)
- 「フランス国債市場の構造と新展開 — 1980年代を中心にして —」(上)* (社団法人 公
社債引受協会編『公社債月報』1987年8月号)
- 「フランスにおける金融・資本市場改革の現段階」(金融ジャーナル社『金融ジャーナル』
1986年10月号)
- 「発行体からみた社債市場改善の方向性 — 『社債発行に関するアンケート調査』の回答
をめぐって」(中央経済社編『旬刊・経理情報』No.421, 1985年7月)

- 「ユーロフラン債市場の再開——最近のフランス型政策対応をめぐる」* (社団法人 公社債引受協会編『公社債月報』1985年5月号)
- 「資本市場振興からみた利子源泉徴収課税廃止の意義——西ドイツおよびフランスを中心にして——」(財団法人 日本証券経済研究所編『証券研究』第75巻, 1985年3月)
- 「ECU債市場の現状——現段階における発展のいみについて——」(財団法人 日本証券経済研究所大阪研究所編『証券経済』第151号, 1985年3月)
- 「第1次世界大戦前のフランス関税政策——その発展をつうじてみたフランス経済分析——」(財団法人 日本証券経済研究所大阪研究所編『証券経済』第150号, 1984年12月)
- 「リュベール版資本論第二部を読む」(日本評論社『経済評論』1981年4月号)

5. 書評・文献紹介

- 〔書評〕 Catherine Mory et Philippe Bercovici, *L'Incroyable Histoire de la Littérature Française* (青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第72巻第3号, 2020年9月)
- 〔書評〕 P. F. Sloan and S. E. Weinberg, *What's Exactly The Matter With Me?: Memoirs of A Life in Music* (青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第71巻第3号, 2019年12月)
- 〔書評〕 船木恵子著『はじめて学ぶヨーロッパ』(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第71巻第2号, 2019年9月)
- 〔書評〕 ジョン・ヒル・バートン著『書物の狩人』(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第70巻第4号, 2019年3月)
- 〔書評〕 アンヌ・ヴィアゼムスキー著『それからの彼女』(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第70巻第2号, 2018年9月)
- 〔書評〕 Jean-Baptiste Malet, *L'Empire de l'or rouge: Enquête mondiale sur la tomate d'industrie*, Paris, Librairie Arthème, Fayard, 2017, 283p. (青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第70巻第1号, 2018年6月)
- 〔書評〕 Anne-Claire Hoyng, Turgot et Adam Smith: Une proximité étrangère [Champion Essai 44], Paris, Honoré Champion, 2015, 212p. (経済学史学会『経済学史研究』第69号, 2018年1月)
- 〔書評〕 マイケル・ルイス著『世紀の空売り——世界経済の破綻に賭けた男たち』(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第63巻第4号, 2011年3月)
- 〔書評〕 Pierre Cahuc et André Zylberberg, *Les réformes ratées du Président Nicolas Sarkozy* (青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第62巻第4号, 2010年3月)
- 〔書評〕 Guy de Verhofstadt, *Les Etats Unis d'Europe* (青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第58巻第2号, 2006年9月)

- 〔書評〕 Joachim Bitterlich, *France-Allemagne: Mission impossible? Comment relancer la construction européenne*〕(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第57巻第2号, 2005年9月)
- 〔書評〕 Jacques Delors (avec la collaboration de Jean-Louis Arnaud), *Mémoires*〕(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第57巻第1号, 2005年6月)
- 〔書評〕 Norbert Olzak, *Histoire des banques centrales*〕(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第53巻第3号, 2001年12月)
- 〔文献紹介〕 フローラ・ルイス著『ヨーロッパ——民族のモザイク』(上・下)〕(青山学院大学図書館報『AGULI』第48号, 1999年7月)
- 〔文献紹介〕 ユーロの実現とドル体制の見直し——中川辰洋著『1999年ユーロ圏誕生——』(駐日欧州委員会代表部編集部編『月刊 europe』1999年2/3月号「著者に聞く(インタビュー)」)
- 〔書評〕 Eric Aechimann et Pascal Riche, *La Guerre de sept ans: Histoire secrète du franc fort. 1989-1996*〕(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第49巻第3号, 1997年12月)
- 〔書評〕 公社債引受協会編『公社債市場の新展開』(金融ジャーナル社『金融ジャーナル』1996年10月号)
- 〔書評〕 Philip Stevens, *Politics and the Pound: The Conservatives' Struggle with Sterling*〕(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第48巻第3号, 1996年12月)
- 〔文献紹介〕 フランスから見た『ユーロ』への道——G. ヴァランス著『フランの伝説 (*La légende du franc*)』を読んで〕(青山学院大学総合研究所『総合研究所ニュース』(8), 1996年11月)
- 〔書評〕 チャールズ・グラント著／伴野文夫訳『EUを創った男——ドロール時代十年の秘録——』(青山学院大学経済学会編『青山経済論集』第46巻第3号, 1994年12月)
- 〔書評〕 川北稔著『工業化の歴史的前提——帝国とジェントルマン』(日本評論社『経済評論』1984年8月号)
- 〔ピエール・ユリ著『(フランス変革のための) 租税改革 (Pierre Uri, *Changer l'impôt (pour changer la France)*, Éditions Ramsay, 1981)』〕** 佐藤進監修「海外文献紹介」第9回(税務経理協会編『税経通信』1984年1月号)
- 〔書評〕 P. ノーア/T. ターナー著『資本主義とエネルギー危機』(時潮社『経済学批判』13, 1983年4月)
- 〔書評〕 佐和隆光著『経済学とは何だろうか』(時潮社『経済学批判』13, 1983年4月)
- 〔書評〕 解き放たれたプロメテウス——D・S・ランダス著『西ヨーロッパ経済史』を読んで——(丸山真人と共著)(日本評論社『経済評論』1982年4月号)

6. 時事コラム・エッセー等

- 「もう一つのナゴルノ・カラバフ問題」（日本経済評論社広報誌『評論』第220号，2021年1月）
- 「Paris sera toujours Paris」（日本経済評論社広報誌『評論』第219号，2020年10月）
- 「言語と文法（またはスタイル）——AとBの対話——」（青山学院大学図書館報『AGULI』第108号，2020年9月）
- 「I read the news today, oh boy...」（日本経済評論社広報誌『評論』第218号，2020年8月）
- 「聖者の千慮に一失」（日本経済評論社広報誌『評論』第217号，2020年4月）
- 「語り ^{カタリ} 騙り ^{カタリ} うつろな心」（日本経済評論社広報誌『評論』第216号，2020年1月）
- 「独り相撲」（日本経済評論社広報誌『評論』第215号，2019年9月）
- 「佛學事始」（日本経済評論社広報誌『評論』第214号，2019年6月）
- 「一步前進，三歩後退」（『対話』第6号，武蔵大学経済学部櫻井毅ゼミ同窓会「対話」編集委員会，2019年5月）
- 「経済学における普遍性と土着性，国際性と国民性——佐伯尚美先生の宿題に答える——」（『対話』第5号，武蔵大学経済学部櫻井毅ゼミ同窓会「対話」編集委員会，2017年10月）
- 「EUはどこへ向かうのか？～ギリシャとイギリスがEUを離脱する日は来るのか～」（青山学院大学『AGU インサイト』，2016年3月）
- 「お公家さんと野武士の大將——白井義隆君の思い出——」（『対話』第4号，武蔵大学経済学部櫻井毅ゼミ同窓会「対話」編集委員会，2015年10月）
- 「Ars longa, vita brevis」（青山学院大学図書館報『AGULI』第98号，2015年4月）
- 「Epoche（立ち止まって考える）」（青山学院大学経済学部HP Teacher's café，2010年6月）
- 「ヴァンカと『私』の先に見えたもの」（青山学院大学図書館報『AGULI』第87巻，2010年4月）
- 「在外研究記 カルタゴの見える風景」（青山学院本部広報部・青山学報委員会編『青山学報』第231号，2010年3月）
- 「妥協より『空席』がマシ 日銀の将来を探る好機* Column「ミスター WHO」の少数異見（東洋経済新報社『週刊東洋経済』2008年4月5日号）
- 「独・大連立の立役者 わが民主党との違い* Column「ミスター WHO」の少数異見（東洋経済新報社『週刊東洋経済』2008年2月16日号）
- 「救世主かオオカミか 政府系ファンドの正体* Column「ミスター WHO」の少数異見（東洋経済新報社『週刊東洋経済』2007年12月20日～2008年1月5日号）
- 「ノーベル賞の名に値しない『経済学賞』はいらない* Column「ミスター WHO」の少数異見（東洋経済新報社『週刊東洋経済』2007年11月17日号）

- 「イングランド銀行の屈伏 『自立』は見せかけだった」* Column 「ミスター WHO」の少数異見 (東洋経済新報社『週刊東洋経済』2007年10月6日号)
- 「イタリアの『暗い過去』 銀行“浄化”は進んだか」* Column 「ミスター WHO」の少数異見 (東洋経済新報社『週刊東洋経済』2007年8月25日号)
- 「ECBの『超ユーロ高』 サルコジ意外な沈黙」* Column 「ミスター WHO」の少数異見 (東洋経済新報社『週刊東洋経済』2007年7月7日号)
- 「EUには『吉』 “新米”サルコジの勝利」* Column 「ミスター WHO」の少数異見 (東洋経済新報社『週刊東洋経済』2007年5月26日号)
- 「超ユーロ高もたらず政治家たちの“不一致”」* Column 「ミスター WHO」の少数異見 (東洋経済新報社『週刊東洋経済』2007年4月7日号)
- 「『理念』と『使命』の間」* Column 「ミスター WHO」の少数異見 (東洋経済新報社『週刊東洋経済』2007年2月17日号)
- 「ジャンクフードに甘い厚労省」* Column 「ミスター WHO」の少数異見 (東洋経済新報社『週刊東洋経済』2006年12月23日号)
- 「不正を恥じないMBA学生」* Column 「ミスター WHO」の少数異見 (東洋経済新報社『週刊東洋経済』2006年11月11日号)
- 「邦銀再びの『国際化』路線」* Column 「ミスター WHO」の少数異見 (東洋経済新報社『週刊東洋経済』2006年10月7日号)
- 「アフリカ外交 中国と日本の差」* Column 「ミスター WHO」の少数異見 (東洋経済新報社『週刊東洋経済』2006年8月12-19日号)
- 「国家百年の計にカネをケチる」* Column 「ミスター WHO」の少数異見 (東洋経済新報社『週刊東洋経済』2006年7月1日号)
- 「仏の“知恵” 試す雇用政策」* Column 「ミスター WHO」の少数異見 (東洋経済新報社『週刊東洋経済』2006年5月20日号)
- 「イタリア銀行界『鉄壁』の中身」* Column 「ミスター WHO」の少数異見 (東洋経済新報社『週刊東洋経済』2006年3月25日号)
- 「古くて新しい脅威——銀行強盗の復活」* Column 「ミスター WHO」の少数異見 (東洋経済新報社『週刊東洋経済』2006年1月28日号)
- 「HIA——ドル高の本当の理由」* Column 「ミスター Who」の少数異見 (東洋経済新報社『週刊東洋経済』2005年12月3日号)
- 「買収拒否・フランスの理由 食と文化の安全保障」* Column 「ミスター WHO」の少数異見 (東洋経済新報社『週刊東洋経済』2005年8月27日号)
- 「GSの凄腕バンカー 新生銀行とドイツ進出へ」* Column 「ミスター WHO」の少数異見 (東洋経済新報社『週刊東洋経済』2005年7月16日号)

- 「モルスタ内紛に見るウォール街の病膏育」* Column「ミスター WHO」の少数異見（東洋経済新報社『週刊東洋経済』2005年5月28日号）
- 「ベアリング10周年 ならず者は一掃されたか」* Column「ミスター WHO」の少数異見（東洋経済新報社『週刊東洋経済』2005年4月2日号）
- 「米経常赤字の源流 消費者金融を絞れ」* Column「ミスター WHO」の少数異見（東洋経済新報社『週刊東洋経済』2005年2月12日号）
- 「文科省のボケとドタバタ 幻想のロースクール」* Column「ミスター WHO」の少数異見（東洋経済新報社『週刊東洋経済』2003年11月8日号）
- 「スウェーデン国民の“Nej” 欧州圏は政経“股裂き”に」* Column「ミスター WHO」の少数異見（東洋経済新報社『週刊東洋経済』2003年10月11日号）
- 「米国は陰でニンマリ 為替介入アリ地獄」* Whisper「ミスター Who」の覆面コラム（東洋経済新報社『週刊東洋経済』2003年9月6日号）
- 「幻想だった？『グローバルな消費者』」* Whisper「ミスター Who」の覆面コラム（東洋経済新報社『週刊東洋経済』2003年8月2日号）
- 「ECBの新船長は詩人テクノクラート」* Whisper「ミスター Who」の覆面コラム（東洋経済新報社『週刊東洋経済』2003年7月5日号）
- 「『自由』か『蚤』か それが問題だ」* Whisper「ミスター Who」の覆面コラム（東洋経済新報社『週刊東洋経済』2003年6月7日号）
- 「頼みは現地の新聞？ お寒い情報収集体」* Whisper「ミスター Who」の覆面コラム（東洋経済新報社『週刊東洋経済』2003年4月12日号）
- 「新独仏枢軸の形成、取り残されるイギリス」EU通信第7回（東洋経済新報社『金融ビジネス』2000年10月）
- 「あのブンデスバンクが、『ドイツ・マルク博物館』に？」EU通信第6回（東洋経済新報社『金融ビジネス』2000年9月）
- 「ブレア敗北でイギリス、EU離脱」EU通信第5回（東洋経済新報社『金融ビジネス』2000年8月）
- 「パリの銀行マン最新事情」EU通信第4回（東洋経済新報社『金融ビジネス』2000年7月）
- 「思惑外れた巨大保険会社」EU通信第3回（東洋経済新報社『金融ビジネス』2000年6月）
- 「MOF高官投書の逆効果」EU通信第2回（東洋経済新報社『金融ビジネス』2000年5月）
- 「一気には進まないヨーロッパ再編事情」EU通信第1回（東洋経済新報社『金融ビジネス』2000年4月）
- “EMU and Its Implication for Asia: What Can Asia Learn from Europe?”, April 2000, Proceeding

of Symposium 《Missing Link between Asia and Europe》, organized by Asia-Europe Forum for Young Professionals, sponsored by the French Embassy in Japan and the Delegation of the European Union in Japan, at Tokyo International Forum Conference Room, January 1999.

“Japan: Annual bond issuance rose more than JPY 100 trl in 1999”, *Economic Focus*, Équipe Recherche Économique, Société Générale, Paris-La Défense, février 2000.

「弁証法仕立てのパロディー風迷子のヒツジ物語」(『ともしび』第76号, 青山学院大学第二部『ともしび』編集委員会, 1999年11月)

「¡Non pasarán!」(『ともしび』第75号, 青山学院大学第二部『ともしび』編集委員会, 1999年3月)

「地上に降りたスーパーモデル」(『ともしび』第74号, 青山学院大学第二部『ともしび』編集委員会, 1998年11月)

「再び巡りくる美しき五月」(『ともしび』第73号, 青山学院大学第二部『ともしび』編集委員会, 1998年4月)

「紫煙にまつわるエトセトラ」(『ともしび』第72号, 青山学院大学第二部『ともしび』編集委員会, 1998年3月)

「夫婦の晩年」(『ともしび』第71号, 青山学院大学第二部『ともしび』編集委員会, 1997年11月)

「出会いはえてしてこんなもの」(『ともしび』第70号, 青山学院大学第二部『ともしび』編集委員会, 1997年4月)

「そうでないと, カネの下敷きになるならね」(『ともしび』第65号, 青山学院大学第二部『ともしび』編集委員会, 1995年11月)

「ラストチャンスは青キャンで」(『ともしび』第63号, 青山学院大学第二部『ともしび』編集委員会, 1995年3月)

「車イスからみたパリの情景」(青山学院大学図書館報『AGULI』第29号, 1994年11月)

「リユクサンプル公園の猫のこと」(『ともしび』第62号, 青山学院大学第二部『ともしび』編集委員会, 1994年11月)

「欧州通貨を混乱させた英国の経済・外交政策」* 深層海流「ヨーロッパ」編(東洋経済新報社『金融ビジネス』1992年12月号)

「二つの統合問題のために迫られる独の財政再建」* 深層海流「ヨーロッパ」編(東洋経済新報社『金融ビジネス』1992年11月号)

「国際金融市場に出没! カネに飢えた妖怪たち」* 深層海流「ヨーロッパ」編(東洋経済新報社『金融ビジネス』1992年10月号)

「ECU債市場に学ぶ? ADBのアジア重視策」* 深層海流「ヨーロッパ」編(東洋経済新報社『金融ビジネス』1992年9月号)

- 「欧州統合のカギを握るミッテランの危険な賭け」* 深層海流「ヨーロッパ」編（東洋経済新報社『金融ビジネス』1992年8月号）
- 「ヨーロッパ化に揺れる英国シティの監督体制」* 深層海流「ヨーロッパ」編（東洋経済新報社『金融ビジネス』1992年7月号）
- 「EMU 進展で問われる加盟国政府の信用力」* 深層海流「ヨーロッパ」編（東洋経済新報社『金融ビジネス』1992年6月号）
- 「大欧州へ法王庁も黙認 イタリア銀行『離婚』事情」* 深層海流「ヨーロッパ」編（東洋経済新報社『金融ビジネス』1992年5月号）
- 「証券不祥事で加速 ドイツ金融市場改革」* 深層海流「ヨーロッパ」編（東洋経済新報社『金融ビジネス』1992年4月号）
- 「『大欧州』出現で揺れる金融大国スイスの黄昏」* 深層海流「ヨーロッパ」編（東洋経済新報社『金融ビジネス』1992年3月号）
- 「仏が構想し、独が実体を与えた『欧州統合』」* 深層海流「ヨーロッパ」編（東洋経済新報社『金融ビジネス』1992年2月号）
- 「第二次“ビッグバン”が小口取引を追い詰める」* 深層海流「ヨーロッパ」編（東洋経済新報社『金融ビジネス』1992年1月号）

7. 辞書等の項目解説・会社案内

- 『CLF 債券発行 1998年版（Crédit Local de France（フランス・クレディローカル銀行）、*Bond Issues/Emprunts obligataires*, Paris, mai 1998）』（1998年9月）（翻訳・編集）
- 『フランス・モーゲージクレジット銀行中央会——住宅金融債権流動化の機構（Caisse Centrale du Crédit immobilier de France (3CIF), Paris, 1998）』（1998年7月）
- 『CLF 債券発行 1997年版（Crédit Local de France（フランス・クレディローカル銀行）、*Bond Issues/Emprunts obligataires*, Paris, mai 1997）』（1997年9月）（翻訳・編集）
- CDC（フランス預金供託公庫）東京駐在員事務所編『CDC キャピタルマーケット——設立根拠法と財務状況——』, 1996年9月（Caisse des Dépôts et Consignations Bureau de Représentation de Tokyo, *CDC Marché: Présentation juridique et financière*, Tokyo, le 1^{er} septembre 1996）
- 『CLF 債券発行 1996年版（Crédit Local de France（フランス・クレディローカル銀行）、*Bond Issues/Emprunts obligataires*, Paris, juin 1996）』（1996年9月）（翻訳・編集）
- 『CLF 債券発行 1995年版（Crédit Local de France（フランス・クレディローカル銀行）、*Bond Issues/Emprunts obligataires*, Paris, juin 1995）』（1995年9月）（翻訳・編集）
- 『金融時事用語集 1994年版』（金融ジャーナル社, 1994年1月）「ディーリング業務」, 「ブライマリー・ディーラー」, 「EU 金融市場統合」, 「EU 経済通貨統合」, 「総合銀行主義」

The Bond Underwriters Association of Japan, *Bond Market in Japan 1993*, July 1993 (企画・編集)

『金融時事用語集 1993年版』(金融ジャーナル社, 1993年1月)「ブローカレッジ業務」,
「プライマリー・ディーラー」, 「EU 金融市場統合」, 「EU 経済通貨統合」

財団法人 証券経済研究所編『現代証券経済辞典(新装)』(日本経済新聞社刊, 1992年2月)「フランスの証券市場」

The Bond Underwriters Association of Japan, *Bond Market in Japan 1992*, July 1992 (企画・編集)

『金融時事用語集 1992年版』(金融ジャーナル社, 1992年1月)「ブローカレッジ業務」,
「ディーリング業務」, 「プライマリー・ディーラー」, 「証券売買業務」

『金融時事用語集 1991年版』(金融ジャーナル社, 1991年1月)「EC 金融統合」, 「ECU 債市場」, 「欧州通貨制度(EMS)」, 「プライマリー・ディーラー」, 「証券売買業務」

The Bond Underwriters Association of Japan, *Bond Market in Japan 1991*, July 1991 (企画・編集)

The Bond Underwriters Association of Japan, *Bond Market in Japan 1990*, July 1990 (企画・編集)

The Bond Underwriters Association of Japan, *Bond Market in Japan 1989*, July 1989 (企画・編集)

The Bond Underwriters Association of Japan, *Bond Market in Japan 1988*, July 1988 (企画・編集)

The Bond Underwriters Association of Japan, *Bond Market in Japan 1987*, July 1987 (企画・編集)

8. 学会報告

「カンティヨン, ケネー, テュルゴー——18世紀フランス価値論形成史に関する一考察——」(経済学史学会 第79回大会, 於・滋賀大学彦根キャンパス, 2015年5月30日)

「自由論題『債券市場』司会者」(証券経済学会 第79回全国大会, 於・駒澤大学, 2013年6月30日)

「ユーロボンド創出の理念と現実」(共通論題「ユーロ危機と証券市場」)(証券経済学 第77回全国大会, 於・関東学院大学, 2012年6月10日)

「『資本』概念の生成と発展に関する一考察——テュルゴー学説の貢献とその足跡にみる問題点——」(経済学史学会 第75回全国大会, 於・京都大学, 2010年11月6日)

「ECB(ヨーロッパ中央銀行)の金融政策の展開——その戦略と課題——」(証券経済学会 第51回全国大会, 於・慶応義塾大学三田校舎, 1999年6月19日)

「社債市場の現況と展望」(岩井宣章と共同発表)(証券経済学会 関東部会, 於・東京証券会館, 1993年7月16日)

「最近のドイツにおける金融政策の変容について」(証券経済学会 関東部会, 於・証券経済研究所会議室, 1991年7月16日)

「フランス証券市場改革の現状」(証券経済学会 第39回全国大会, 於・日本大学経済学部三崎町校舎, 1988年6月18日)

9. 招待講演(ゲストスピーカー)

「ヨーロッパ銀行同盟の現状と展望——銀行セクターの変革に向けて——」(財団法人日本証券経済研究所主催「証券セミナー」, 於・東京証券会館, 2015年6月)

「ユーロ圏債務危機の転換点——2012年6月のEU首脳会議をふり返って——」(財団法人日本証券経済研究所主催「証券セミナー」, 於・東京証券会館, 2012年9月)

「SWF(政府系投資ファンド)の国家持ち株会社化——現状と展望——」(財団法人日本証券経済研究所主催「証券セミナー」, 於・東京証券会館, 2010年11月8日)

「強大化するフランス協同組合金融機関——NATIXISの誕生を中心に——」(政策投資銀行設備投資研究会主催「設研セミナー」, 於・政策投資銀行設研会議室, 2007年2月)

“European Monetary Integration 1969–2002: The long and winding road that led to the euro”, Economic Symposium featuring Nobel Prize Laureate of 2001 Joseph E. Stiglitz “Rebirth of Japan’s Economy in the Age of Globalization”, organized by Aoyama Gakuin College of Economics, April 2002

「国境なき金融の理論と現実——ヨーロッパで1年『バンカー』として見聞きしたこと——」(後期青山学院大学公開講座「ボーダレス時代の金融」, 於・青山学院大学青山キャンパス, 2000年10月。同名タイトルで2000年12月9日NHK第二ラジオ「文化講演会」にて放送)

「大陸ヨーロッパからみたイギリス」(時事通信社ロンドン支局主催「トップセミナー」, 於・サヴォイホテル(The Savoy)カンファランス・ホール, イギリス・ロンドン市, 2000年6月)

“EMU and Its Implication for Asia: What Can Asia Learn from Europe?”, Symposium 《Missing Link between Asia and Europe》, organised by Asia-Europe Forum for Young Professionals, and sponsored by the French Embassy in Japan and the Delegation of the European Union in Japan, at Tokyo International Forum Conference Room, January 1999

「ヨーロッパ通貨統合——企業にとってのインプリケーション——」(企業経営研究会 部会報告, 於・早稲田大学, 1998年7月18日)

- 「諸外国における個人金融資産選択の動向」(郵政省貯金局「金融自由化と郵便貯金に関する調査研究会」(第6回)、於・郵政省第二特別会議室、1997年10月)
- 「ヨーロッパ経済の現況と通貨統合問題——マドリード首脳会議以降のプロセスを中心にして——」(財団法人 国民経済研究協会「国民経済セミナー」、於・国民経済研究協会会議室、1996年10月25日)
- 「共通通貨創出と『欧州の世論』——マース・グループのヒアリング調査を中心にして——」(国際ビジネス研究学会 第4回関東部会、於・明治大学駿河台キャンパス、1996年10月)
- 「EC新時代と統合のゆくえ」(東洋経済新報社・関西経済倶楽部月例講演会、於・関西経済倶楽部ホール(大阪市)、1993年3月)
- 「フランスの金融政策——1980年代の金融市場改革と金融政策評価の視点——」(第9回法政大学経営学部大内兵衛記念公開講座「現代世界の金融政策——その動向と国際比較——」、於・法政大学市ヶ谷キャンパス、1992年12月)
- 「フランスの金融構造と金融改革——金融の証券化、国際化、総合化をめぐる——」(慶應義塾大学三田学会主催「金融の国際化・自由化に関するシンポジウム」、於・熱海共済会館(静岡県熱海市)、1991年9月)
- 「欧州金融システムの再構築」(金融学会 1988年関東部会、於・明治大学駿河台キャンパス、1988年10月)

10. 受託研究・研究費

- 「カンティオン経済理論研究」(日本経済評論社、2016年)(平成28年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費事業(科学研究費助成金)(研究成果公開助成金「学術図書」課題番号16HP5144))
- 「テュルゴー資本理論研究」(日本経済評論社、2013年)(平成25年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費事業(科学研究費助成金)(研究成果公開助成金「学術図書」課題番号255151))
- 「ミッテラン政権下の地方分権化に関する調査・研究」(財団法人 地方債協会、1993年)研究成果の一部公表、「フランス地方財政の現状——地方分権化法施行後の展開を中心にして——」(財団法人 地方債協会編『地方債月報』1994年8月号、所収)

注：上記研究業績は2021年3月末現在。

* 発表時ペンネームまたは匿名を示す。

** 発表時、『税経通信』編集部の方ミスにより筆者を「中川辰徳」と誤記。「中川辰洋」が正しい。